川鵜鶏肋

春屋アロヅ

**mnfikmhyk**

寒くたって平気だよ、ね？

**creature mixing 8**

Fukapon

# Contents

**しきみのもり** 川鵜鶏肋 …… 02
**氷の姫君** 春屋アロヅ …… 44
**私たち、恋愛復旧担当デス** Fukapon …… 54

**峠にて** …… 66

# 雪山にて

mnfikmyhk

CREATURE MIXING 8

# しきみのもり

川鵜鶏肋

「うわぁあっ」

完全武装と分厚い防寒具に身を固めた男の一人が、雪に掘られた落とし穴に足を取られて転倒する。

大した深さではないため骨折には至っておらずとも、捻挫程度は間違いないだろう。

足をもつれさせながらも、数人の男達がおっかなびっくり負傷者に駆け寄る。

殺す必要はない。追撃に参加できない程度の怪我を負わせれば十分だ。むしろ、見捨てることが出来ない程度に負傷させるのがもっとも効率がよい。後送すべき脱落者一名は、もう一名ないし二名の介護要員を伴うことになるから。軍事の世界においては戦力の半数の損耗を称して全滅と称するのはそのためだ。

そして。

木の枝同士を結びつけるような蔦、そしてわざとらしいループを作った蔦。警戒心を増した者達の目には容易く飛び込んでくる。

通り道を予測して短時間で仕掛けた一個の罠が、他の多数のより危険な罠を示唆する。

「くっ、ここら一帯罠だらけってことか！」

「必ず二人一組で行動、ザイルで体をつなげ。一人は捜索、一人は周辺警戒に注力しろ」

本来ならプロの仕掛けた罠は素人にそうそう発見できるものではない。が、疑心暗鬼に陥った男達はただのダミーに引っかかり、存在しない罠を警戒して余計に進撃速度を低下させる。

追撃者達の行動は、今や彼のコントロール下にあると言って良かった。

双眼鏡の使い方が不用意だ。レンズに直接光が当たらぬようにせねば、反射光で自らの位置を暴露する。

もちろん、荒家ともあろう者がそのような無様を呈する事はない。

「素人どもめ」

追いすがってくる奴らの右往左往っぷりに、つい軽蔑の言葉が口をつく。

障害物に事欠かない市街でばかり活動しているせいで、遮蔽物に乏しい山での経験が致命的に不足している。

「そのおかげで、こんな足手まといを連れていてもなんとか逃げられるんだもの。むしろ感謝」

「科戸を連れていく事自体が目的だからな。それに逃げているつもりはない」

「いつもすまないねえ。私がこんな体でさえなければ」

冗談めかした台詞だが、その声には力がない。

「バカばっかり言ってないで大人しくしてろ。まだ二つは峠を越えにゃならん。体力を無駄にするな」

「体力が心配なのは荒家（あらや）センセの方よ。あたしはおぶさってるだけの頭脳労働担当だもの。かなり辛いんでしょ？」

と、背中でニット帽の少女が囁く。

〝せんせい〟、ではなく頭のセにアクセントを置いた〝センセ〟のイントネーションにからかうような調子が含まれている。

「枯れ枝みたいな体で何を心配してやがる」
「……失礼な。あと三年もしたら凄いダイナマイトになるんだから、女子三年合わざればガン見必至って」
と軽口で強がってみせてはいるが、
分厚い毛皮と何重もの保温繊維にくるまれているにもかかわらず、彼女の体温は次第に低下しつつある。
「つかまって揺られてるだけでも体力は消耗する。いいから静かにしてろ」
「はいはい分かりましたよ、センセの仰せのままに……」

専門の山岳歩兵ならともかく、通常の戦闘訓練を受けた程度では、山に関しては素人も同然。
百人・二百人用意したところで、先行する彼を雪山で捕捉・確保することは本来ならまず不可能だ。
だが……
正規軍に相当する兵器のみならず特殊な装備で武装した一個中隊規模の追跡者を完全に追い払うことは、いかに荒家の手腕を持ってしても困難だった。
痩せても枯れても粛正部隊だけあって、罠による怪我人の十人やそこらで簡単に追撃を諦めたりはしない。
だからこそ迂闊な攻撃で彼らを本気にさせてしまい、より以上の戦力を招き寄せる藪蛇は避けねばならなかった。
見失われず、そして捕まらず。微妙な状態を保ちつつ目的を達成する必要があるのだ。
そして何より、荒家達には十分な時間が残されていない。
明らかに優位に見える現状でも、彼ら二人が狩られる側にあることは間違いなかった。
だからこそ、努めて明るさを装わねばならない。困難を乗り越えられる可能性を、一縷の希望を信じるために。
この年でそれを理解しているのだから聡い娘だが、秘めた心中を思うと物わかりの良さにかえって胸が痛む。
もっとあがいて、わめいて、感情をぶつけてくれてもいい。それを受け止めきり、力になる事が出来たら。
その時こそ本当の意味で彼女の〝センセ〟になれる気がする。

荒家行晴（あらやゆきはる）の立場は、珠坂大学附属紫城高等学校中等部の新任体育教師。
科戸芙柚（しなどふゆ）の立場はといえば、長期入院から復学してきたばかりの一学生に過ぎなかった。
新学期初っぱなから見学を決め込む少女の存在に気付いたあの頃には……よもや雪山で戦争のまねごとをやる羽目になるなど夢にも思わなかった。ほんの二週間前まで認識にはなかった少女を守って。
膝を立ててうつむき加減で座る彼女の顔は、色素の薄いセミロングの髪で半ば覆い隠されていたものだ。
「おい、大丈夫か？」
荒家は形式的に声をかけただけのつもりだったが、
「いえ、いつものことです・・・問題ありません」
弱々しく首を上げた少女の顔には血の気がなく、いっそ蒼白といってよいほどで。
諦観だけを宿した形だけの笑顔を目にした瞬間、ぞくりとさせ

られた。こいつは放ってはおけないと確信した。
愛らしいというより綺麗な顔立ちだが、線が細いを通り越して、何かに蝕まれている者のみが備えうる退廃的で病的なところのある美しさを備えていた。
幽霊に例えるのはさすがに気の毒としても、年齢相応の健康的なところは微塵もない。ステレオタイプだが、例えて言うなら、肺病を得てサナトリウムで療養中の病弱少女といったところか。
と、生まれついての無骨者らしから戦前文学的な発想に、荒家は苦笑せざるを得なかった。
「先生？」
「いや、なんでもない。それより」
会話の間にも、少女の上体は不安定にゆらゆらと傾いでいる。
まだ雪こそないものの、このまま外気に当てておくのは危険だ、とアウトドアの専門家の直感が告げている。
「やっぱ保健室行っとけ。保健医員、たのむ」
生徒達の視線を集めた女生徒が、気乗りしない要するを隠そうともせずだらだらと進み出る。
「……」
ぼけっと指示待ち。
ついこの間までランドセルをかついでいただけあって、自分で判断する癖がついていないのだろう。
いちいちイライラさせられるが、こんな程度でキレていては中学教師はやっていられない。
「保健室まで連れて行ってやれ」
「私がですか？」
「そのための役職だろう。他の誰がやるんだ」
整列した他の生徒達へと振り向いては表情で助けを求めるが、すぐさま視線を逸らされる。
その後もあちこちに視線をやるばかりで、保健医員はいつまでもぐずぐずしている。
「長沢っ」
荒家の言葉に多少の怒気が籠もっていたといって誰が責められよう。
「保健医員だし、先生に言われたし、不可抗力だし！」
弁解じみた（そのものか）言葉と必死の形相は、荒家ではなく同級生達へと向いている。
何故ここで言い訳が必要あるのかわからないが、随分な渋り様だ。何も犯罪を強要されているわけではないのだから。
あるいは。
集団でのいじめでも受けているのか？
保健医員の長沢はクラスの中では寡黙で目立たない方で、一歩遅れて他人に追従することが多い。クラスのリーダー格の生徒達によって何らかの対応方針が決定されているとしたら、その意向に逆らうことは難しいだろう。
「いくよ科戸さん……」
皆の無言を一応の肯定と解釈したか、ガタガタ震えながらも病弱少女に手を貸そうとした長沢であったが、わずかに指が触れあうやいなや慌てて手を引いた。
「熱っ！」
目を丸くした保健医員は、一瞬自分の手に目をやってから一歩後ずさる。
「大丈夫。自分で歩けるから」

とても大丈夫そうには見えないが、相手の立場を気遣ってかやんわりと断りの声をあげた病弱少女はそう言って助けを断り、自分だけの力でよろよろと立った。

露骨にほっとした表情になる長沢が、さらに一歩引く。

不快きわまりない態度ではあるが……教師が四六時中つききりで監督出来ない以上、クラス内での立場の保持は教師の命令に勝る行動原理となりうる。長沢ばかりを責められない。

が、先ほどから一段と寒さが増した中で、頬を紅潮させた少女の周囲には陽炎が立ち上っているようにさえ感じられた。それはさすがに大袈裟としても、相当の高熱があるに違いない。

「心配だな。お前らしばらく実習しとけ。そうだな、運動場十周終えた者から体育館に入って休んで良し。くれぐれも騒ぐなよ」

指示の過酷さを訴える怨嗟の声を無視して、荒家自身は二人について保健室に向かう。

保健医員である以前にクラス内の弱者という立場にとらわれている長沢では、病人の意思を尊重しつつ、どうしても無理だと判断したら無理矢理にでも手を貸す、といった機微を期待するのは難しいだろうから。

「どうせついてくんなら、長ちゃんにやらせないで、自分で連れて行けばいいのに」

「ひでえよな」

背後からひそひそ声。

「聞こえてるぞーお前ら。いいからちゃんと走れ」

いや、わざと聞こえるように言ったのかもしれない。

彼ら彼女らの声には後ろめたそうなところは一切感じられず、むしろ正当な非難としての響きがあった。

そして、声の主は角沢に秋吉、横峰、それからおそらく真城。いずれも中一としてはしっかりした倫理観や態度を備えていると評されている優等生だ。

どこがどうとは説明しにくいが、このクラスは何かがおかしかった。

「ああ科戸さんね、聞いてるわ」

年配のいかにも優しげな面持ちの養護教諭の口からは、二言目には謝罪の言葉が放たれていた。

「申し訳ないけど、これから緊急の会議に出なきゃならないから、私はついててあげられないのよ。解熱剤は持ってるのよね？　飲んだら、体が楽になるまでベッドで休んなさい。担任には私から連絡しておくから、良くならないようならお家の人に迎えに来てもらうといいわ、ごめんなさいね」

荒家自身は緊急の職員会議の話は聞いていない。ならば保健所か何かとの打ち合わせだろうか。何にせよ間の悪いことだ。

慌ただしく指示を出しおえた養護教諭は、ろくに診察もせずそそくさと保健室を後にする。

異様に素早く淡泊な対応にも思えるが、もしもの場合の対応法は病院から引き継がれていたといったところだろう。

だが、さすがに一人で放っておくというのは……

「すまんが長沢」

「嫌です！」

まだ内容も言わないうちに、戸口の方から鋭い拒絶の声が上がる。いつの間に？

「ごめんなさいっ……」

直後、小さな謝罪の声とぴしゃりという扉の音だけを残し、長沢は脱兎のごとく保健室から姿を消した。
「あのな、科戸」
「私なら一人で平気です。いつものことですから」
「本当に大丈夫なんだろうな」
「三十二人を待たせてるんですから、一人にだけ構ってないで先生も自分の仕事をしてください」
「くどいようだが」
「ぶっちゃけ、二人っきりの状況って身の危険を感じるんですけど」
冗談めかして言われた。
参った。なんて頑固者だ。
「……それだけ減らず口がたたけるんなら大丈夫か」
「はい、ここは私に任せて先に行ってください。それから長沢さんにも謝っ……いえ、何でもありません」
ここもまた、何かがおかしかった。

強烈な第一印象と、何とも表現しづらい違和感を残した出会いの後。荒家は自然と科戸とその周囲の動向を気にかけるようになっていた。
だが、表だった行動は状況に影響を与える。動くのは影響をある程度予想できるようになってからで良い。
情報収集の基本は観察だ。常日頃と同じように行動していても、そのつもりで注意深く目を光らせ聞き耳を立てるだけでもかなりの情報が得られるものだ。

生徒達の科戸芙柚に対する態度はかなり露骨なもので、呆れたことに教師の前であってもほとんど変化はなかった。
教室での座席は左最後尾で、前方・側方とも一列ずつの空席を介するようになっている。まさに隔離といったところだ。
会話は必要最小限の事務的用件のみ。
中途半端な人数の班が複数存在するのに、彼女はいずれの班にも所属していない。
委員を掛け持ちしている者が何人もいるのに、彼女には職務が与えられていない。
彼女に対する態度に男女の差はないばかりか、教師にしても彼女を指名する事はないらしい。
熊や蛇といった危険な生物にでも対する態度に近い。なるべく関わりたくないが無視も恐ろしい、といったところか。
ここで科戸が下手に怒りや反発の態度を見せていたならば、追い詰められた畏れは容易く攻撃性へと変換され得た可能性がある。
が、現実にはそのようにはならなかった。
結果だけ見るならば、控えめで出しゃばらない性格が状況とかみ合っただけかもしれない。
だがもしも、科戸が自らの立場を正しくわきまえ立ち回った結果であるならば。彼女は見た目よりずっと大人なのかもしれない、と思えてならなかった。
だからといって、彼女がこの状況に苦痛を感じていないかと言えば、それは否であろうが。

科戸自身から少し視点をずらし、さらに調査を継続する。

当初こそ場違いさに耳を疑ったものだが、彼女の周辺でしばしば囁かれる言葉がある。

〝雪女（雪娘）に関わるな〟

というものだ。

どの場合も〝雪女〟あるいは〝雪娘〟が科戸を示すことは文脈より明らかであったから、彼女に対する奇妙な態度の根底にあったのはなんと妖怪伝承という事になる。

珠坂における雪女伝説の詳細については、ネットと近所の書店で簡単に入手できた。珠坂大の民俗学者による詳細な研究論文から、幼児向けの絵本ですら四種も見つかったほどだ。

文献によって多少の差はあるが、ストーリーの骨子は概ね同じといえる。

起：麓の人間の温もりに憧れた雪女が珠古（たまふる）山から降りてくる。

承：雪女は無意識に人の温もりを吸い取り、その心を冷たく荒ませては不幸をもたらしてしまう。

転：人々は雪女を悪鬼羅刹と恐れるようになり、旅の高僧に退治を依頼する。

結：高僧の説得により人と相容れぬ身の罪を悟った雪女は、絶望して珠古山に戻り氷の柱に姿を変える。

というものだ。

粗筋を説明しているだけでもむかっ腹のたってくる救いのない話だが、これが現実の少女を苦しめているとなればそれこそ罪深い。

では物語がどうやって科戸に結びつくかといえば、

ひとつ、科戸の灰白色の瞳は、雪女を彷彿させる特徴である。

ひとつ、科戸が高熱を出すと決まって気温が下がる（これは普通は逆に解釈するところだと思うが）。

ひとつ、科戸の名前〝芙柚〟は〝冬〟、ひいては〝雪〟に通じる。

と言うことらしい。

単純な偶然も三つも重なれば必然？　ばかばかしい。

江戸時代ならいざしらず、西洋的合理手技の広まった現代においては、科戸イコール不幸をもたらす雪娘説の根拠としては極めて薄弱だ。

小学生低学年までの子供はともかく、いい歳になる頃には大人の行動から科学的思考を学ぶものだ。

民間伝承からの恐怖感など大人になる前に覚める夢であり、せいぜいサンタクロースと良い勝負を繰り広げる程度が関の山のはず。

このような無理な理由でのいじめ（？）がクラス規模で幅を利かせるとなれば、大人もまた同じ行動原理に動かされている可能性がある。

珠坂は大都会とは言えないものの、前時代的な迷信が強く根付くほどの閉鎖的な田舎とも思えないのだが。

これ以上の情報収集には実際に動いてみるのが有効と判断した荒家は、科戸の担任に接触してみることにした。

「科戸の亡くなった両親は財団に勤めていたそうですよ。その縁で今は学園が親代わり、彼女は特待生扱いの寮住まいです」

ちょうど荒家と似たような立場か。あの年齢で天涯孤独とは、

しっかりしているのも頷ける。
「はあ？　まさか、昔話が原因でいじめだなんて」
荒家より十以上年下の青年教師は、ばっさり切って捨ててのけた。
人生経験では負けていても、教師としては自分が先輩だ、と言わんばかりに得意げに。
「不幸な家庭環境だけでなく病気とも闘っている気の毒な子を嫌ったりいじめたりする生徒なんて、この学校にいる筈がありません」
生徒達の動向を最も近くで見ている筈の担任が、根拠も示さず真っ向から否定した。
最も親身になるべき担任自身もまた、生徒と同じように科戸を避け続けているのは、既に荒家の知るところである。
「無視？　いいえ。みんな見守るのも優しさだと知っているんです。科戸は人の手助けを受けることを肯んじない、プライドの高い子ですからね」
科戸は子供じみたプライドなど振りかざしていない。相手を巻き込まぬようにという思いやりゆえの強がりを見抜けないようでは、教育者としては絶望的だ。
事なかれ主義で信じたくない事実を否定し、信じたい幻想にすがっているだけか。こういった思考で自軍を破滅に追い込んだ愚将は歴史上も枚挙にいとまがない。
いずれにせよこの男は人を導く職業には向かない。と荒家は断じた。
誘い水への反応は迅速だった。
担任に接触した翌日、荒家は教頭からの呼び出しを受けた。
元から神経質な顔に加えて、目の下に不健康そうなくまを蓄えた教頭は、こう切り出した。
「多くは言わん。余計なことに首を突っ込むのはやめたまえ、荒家君」
釘差しか。
「何を仰りたいのかよく分かりませんが」
むしろ多くを語って欲しいので、しらばっくれてみる。
教頭はため息とともに渋面を浮かべると、科戸のしの字すらおくびにも出さず、ほとんど意味をなさない苦言を呈した。
「君は十分な経験を積んだベテラン社会人で、昨日今日学校を出た若造ではなかろう。ならば大人の対応をしたまえ。その辺は自衛隊だからといって大きく違うということはないと思うがね」
かつて荒家は、とある不幸な事件の責任を負って自衛隊を去る事になった。その事件に関係した人物の一人がここ珠坂の学校法人の関係者であった事が、その後の彼の運命を決定した。かねてからの夢であった教職を志した彼を珠坂大学財団は全面的にバックアップしたばかりか、教師として採用することを約束してくれたのだ。
その縁あってこの春より珠坂に移り住み、晴れて中等部で働くことになった彼は、初めて尽くしの半年強をいっぱいいっぱいで駆け抜けてきた。
だからこそ、異常に気付くには至らなかった。三学期からの学業復帰を果たした科戸と出会うまでは、
そしてまさに、その異常と向き合おうとしている。
「管理職様ともあろうものが、一体何を恐れているんですか」

「知ってもどうにもならない事を聞くな」
ともあれ、と言葉を継ぐ。
それが大人の対応か。
「これまでは新川の肝煎りと遠慮していたが、これ以上は庇いきれんぞ。他の生徒達に害が及ぶようなら君を切り捨てねばならん。これには校長も同意されている。覚悟しておく事だな」
荒家は見誤っていた。
この人もまた教育者として、生徒達のことを考えている。
小の虫を殺しても大の虫を生かすというのは、全体を守らねばならない管理者としては正しい判断と言える。上層部なりの苦渋の結論ということか。
「肝に銘じておきますよ。世界に一人ぐらいは味方がいても良いでしょう」
あの時の命令違反、いささかたりとも後悔はしていない。この決断にも、後悔することはないだろう。
「そうか。良い覚悟だ」
教頭の眉間に深々と刻まれたしわが、少しだけ緩んだような気がした。
「特定の生徒を依怙贔屓をするような人物には子供を任せられんという苦情が何件も届いていてな。当分の間、君を授業担当から外す。くれぐれも大人しく謹慎していたまえ」
教頭との面談は予想以上の収穫をもたらした。
子供達のみならず、大人社会までもが何かの力に操られている。それを確信できたからだ。
後から思えばあの養護教諭もまた、必要以上に科戸と関わることを避けていたのだろう。
おかしいのは生徒達でも学校でもなく、この街自体だと考えるべきだ。
やるなら自分一人の責任でやれ、と教頭は言外に告げた。言い返るなら、動けば真相に迫れる可能性がある、という事を意味するのではないか。
まったく、あの教頭は本物の狸だ。人の動かし方を心得ている。釘を刺された形に見えても、実際には背中を押された。
上手いこと乗せられているのかもしれない。立場上動けぬ自分の代理として行動してくれる動く手駒として。
だがそれでいい。互いの利害は一致している。
表向きは叱責の形をとってはいるが、謹慎命令もまた彼への支援と見なせるだろう。調査に充てられる時間は十分にある。
もう行動を秘匿する意味はない。むしろ大きく動けばそれだけ大きな反応が期待できる。

表立って動き出したことで、生徒達の態度にも変化が生じた。
もとよりむさ苦しい中年オヤジ、容赦のなさでおそれられる体育教師だ。いよいよ本格的に嫌われるようになるかと覚悟していたが。
予想外にも親身の忠告を次々と受ける事になり、はからずも直接の聞き取り調査へと繋がった。
「先生だから相手しないってわけにはいかないんだろうけど、深入りしない方がいいよ。親父もお袋もそう言ってる」
「見た目怖いしきついけど、熱心だし。辞めさせられたりしない

でよ」
「別に科戸を嫌いなわけじゃないよ。でも私らじゃどうにも出来ないんだ」
「じいちゃんが雪娘は感染る病気みたいものだって言ってた。近づいたら祟られるって」
「関わらない方がお互いのためなんだ。気の毒に思うんなら、放っといてやりなよ」
誰にも悪気はなかった。だが、気の毒なクラスメイトを突き放すことに後ろめたさを感じつつも、同情だけでは危険を冒せないという。
つまりは、現実の一少女を物語の〝雪女〟と同一視し、また、物語の伝える雪女の脅威を現実の危険と感じているという事だ。
実体のない伝承が生徒達の心も行動も縛り、一人の同級生を不幸に陥れているとするなら。このような迷信を子らに吹聴する行為は、もはや犯罪とは言えまいか。
いや。
恐怖を吹き込まれる子供達のみならず、平均以上の教養を持ちそれなりの社会的地位にある大人達までもが、明確に彼女を忌避していた。同僚教師達の態度がその典型ではないか。
彼らが単純に迷信を恐れているとは考えにくい。こういった場合、背後により直接的な動機の存在を仮定するのが無理がない。
では、街ぐるみで一個の少女を忌避せねばならないほどの強い動機を与えるだけの背景とは何なのか。
現状打破のためには、まずはそこから突き止めねばならないだろう。
科戸を庇うような態度を示したにもかかわらず生徒達の支持を失わなかったのが意外なら、科戸本人に苦言を呈されたのはさらに想定外だった。
職員専用トイレから出てきたところで、小柄な少女が突然飛び出してきて立ちふさがったのだ。
彼がトイレに入っていくのを確認し、金魚の水槽の陰でずっと待ちかまえていたのだろう。荒家に気付かれなかったのだから、なかなかいいセンスをしている。
科戸は見た目の弱々しさに似合わぬ勢いで彼に詰め寄ってきた。
「どういうつもりですか」
くりくりしたアーモンド型の眼に深い怒りの色をたたえ、頭二つは大きい荒家を真正面から睨み据える。
迫害してくる生徒達に向けてさえ、寂しげに苦笑するだけであった彼女がこれほど怒りを露わにすることがあろうとは。
小娘の予想外の迫力に怯みつつも、平静を装って相対する。
「何のことだ？」
「私のこと、嗅ぎ回ってますね」
「人聞きが悪いな。ちょっとした調査だ」
「そういうの不快です。やめてください」
「教師には生徒を守る責任がある」
「なら、放っておいてください。今のままなら誰にも迷惑は掛からないから」
言い切る科戸に対し、荒家は鼻で笑った。
こいつは甘っちょろい。何も分かっていないガキだ。
「誰にも？　科戸はどうなる」
「私ならさっきから言ってるじゃないですか、やめてくれって」

言わんとすることはわかる。現状で物理的な危害があるわけでもないからだ。

精神的な問題だけなら我慢できるというのだろう。それさえも、慣れてしまえば単なる日常と成り果てるかもしれない。

だが、こいつは人の心を計算に入れていない。

すさんだ環境に慣れはしても。気持ちは騙せても、魂は傷む。

魂をすり減らし続ければ、ついには人は人でないものに成り果てる。

そうしたものを生みだし続け、せめてもの罪滅ぼしのために教師を志した荒家が、ここでもまた罠に陥らんとする者を前にしているとは。

頭に来た。いや、はらわたが煮えくり返った。

「ふん、生徒の意向なんぞ知ったことか」

自分から手を差し伸べておきながら突き放すような態度に、科戸が露骨に渋面を作る。

「身勝手です！　同情ならもうやめてください。しまいにはほんとに祟りますよ」

祟ると来たか。また自虐的な台詞が飛び出してきた。

見た目とあだ名によらず、熱い娘だ。

だからこそ、荒家はその熱が尽きるのを恐れる。

「ああ、大人ってのは子供から見れば勝手に見えるもんだ。それが嫌なら科戸もさっさと大人になれ」

不快に思われても嫌われても、守るべきものを勝手に守る。それが大人というもの。かつて籍を置いた自衛隊も同じだ。

そして、大人は口ではなく背中で語るもの。

これ以上話すことはないとの言外の意味を込めるように、荒家は食い下がる科戸を尻目に職員室へと入った。

この自分勝手な少女に、大人の本気を見せてやらねばならない、そう決意しながら。

情報収集は荒家の本来の専門分野ではないが、本物のプロフェッショナル達と組んできた間に一通りのノウハウは蓄えている。

門前の小僧というやつだ。

ニュース。新聞。チラシ。統計情報。地域経済情報。風土記。個人出版の詩集まで。入手できるあらゆる情報が役に立つ。

文脈的には記載されていてしかるべきだが、入手可能な情報上では奇妙に削除されている情報。それは、重要情報が意図的に消し去られている事を意味する。

だが、消去が精密で巧妙であるほど、穴の形は入るべき物の形を示すようになるものだ。

結論はすぐに出た。

駅を挟んで海側の新しい町なみとは逆方向。街の南側の高台に位置する旧珠坂村の旧家群。その歴史に関する記述に漏れが目立つ。過去のみならず、現在の土地の所有者や住人の統計についても甚だ怪しい。漁を生業にする家が高台に居を構えていたりと、数字上の矛盾はなくとも不自然さが散見される。

こちらは事情通にとっては周知の事実であるが、ここ珠坂の政治経済その他あらゆる重要な部分には、斗流十家と呼ばれる名門旧家が深々と食い込んでいる。この街を事実上牛耳っていると言っても良いだろう。荒家のバックである珠坂大学財団もその例外ではなく、十家筆頭とされる新川家の影響を強く受けている。道

理で彼の採用に関しても横車を押しまくれたわけだ。
珠坂で指導的立場にあるのが斗流十家であるとして、その支配が民主主義に則った尋常の方法で為されているのなら、敢えて隠す必要はない。
例えば暴力による恐怖。例えば密輸による利益の供与。例えば中毒性のある違法薬物の供給。そういった類の、世間には詳らかに出来ぬ力が動いている可能性が高い。

穴の中身の外形はつかめた。次はさらに中身に迫らねばならない。今度は別の分野の経験が役に立つ。
十家中の第八位。新斗流三家と呼ばれるうちの一家である矢車家の屋敷に、荒家は注目した。
立派な日本家屋は無粋なコンクリートの塀に囲まれ、鉄条網にテレビカメラに数頭の大型犬という警戒ぶり。当の矢車家は何代か前に途絶えたというのに、現在においてもヤクザの大物の屋敷どころか、刑務所かちょっとした要塞なみのセキュリティーが施されている。
こうも不自然な重防御は、重要施設の存在を示しているも同じだ。

手段を問わねばの但し書きさえつければ、自衛隊時代のつてを辿って方策など幾らも見つかる。
最近第六位陸奥家の肝煎りで設立されたセキュリティー会社、正確には会社の皮をかぶった私設軍への電子的攻撃と情報攪乱。陽動としては十分だろう。
ネットワーク上においては攻撃者の規模や力を偽装することは難しくなく、その気になれば実際に多数のコンピュータから攻撃力を借りてくる事も可能という。
かつての仲間、自らウィザードを名乗る調子に乗りすぎの阿呆の受け売りだが、奴のハッカーとしての実力は本物だ。ここは使い道のない貸しを一気に取り立てる事にする。
電話及び電子ネットワークの利用は危険というので、相手の流儀に従って往路はＲＦＣ１１４９改プロトコール（＝伝書鳩と暗号化したメモリーカード）、復路はラジオ広告に紛れさせたメッセージで話をつけた。全く面倒くさい奴だが、経験上その道の専門家の言を軽視してはろくな事がないので、素直に従っておく事にした。

やり過ぎの相手を出し抜くには、さらに想定以上のやり過ぎをぶつけるのが正道だ。
そして、大きな行動の前には準備は十分すぎることはない。
自己診断の結果、作戦目的がぼやけつつある事を自覚。これは作戦時の精神状態としては危険な兆候と判断される。自衛隊時代のセルフコントロールマニュアルに従い、目的の再確認を施行。
「第一目標、科戸芙柚の身柄の保全に直接繋がる情報、例えば〝雪娘〟排斥行動への十家の組織的関与の証拠の発見と確保。第二目標、間接的に十家の力を利用するための情報、例えば組織的犯罪行為の証拠の発見と確保。よし」
定石通り、判断能力の低下する払暁を狙って作戦開始。
ぴったり時間通りの〝電子鳩〟の攻撃に、警備の一部が第一位新川本邸への襲撃対策に引き抜かれる。さらにネットワークからの情報偽装が追加された事により、少なく見積もっても三十分の

猶予が期待される。

「まさかこんなものを日本で使うことになるとはな」

続いて、風上の塀裏に数個の手投げ弾を投げ込み、表の警備員と番犬を催眠ガスで無力化する。さすがに化学兵器による攻撃までは想定されていなかったようで、たちまち効果を発揮する。ぐるりと取り囲んだ塀がガスを滞留させるのに一役買ってくれているのが皮肉といえば皮肉か。

夜陰に紛れるような衣服は身につけず、いかにもジョギング中というようなラフなジャージ姿で矢車家正門前を通りかかる。町中ではむしろ目立ち、怪しい者ですと主張するような迷彩より、言い逃れの余地を十分に残しておく方が重要だ。

何食わぬ顔で正門を潜り、ナップザックから取り出した防毒面を装備。本邸の脇を通って裏へと回り込む。

蔵の扉には見た目は古びたかんぬきと錠前。だが脇には近代的な電子錠。

ただの土蔵なら壁を破るのもありだが、おそらくは金属の骨組みが組み込まれている。

おそらくネットワークからは開けない、との〝電子鳩〟の予言通り、この錠はスタンドアローン。逆に言えば多少の無茶は効く。

電子パルスで誤動作させるパターンを選択。ビンゴ。

解錠音を確認してから、機械錠には手をつけずに蔵の周りを一回り。

母屋との間で周囲からの陰になる部分を軽く叩いて歩くと、やがて軽い音の部分を発見。やはり地下への隠し扉があった。

想像通りの二重底だ。表のロックを解除して。表の扉から入っても本命には繋がっておらず、無難なものしか所蔵されていないに違いない。

こうして矢車家の隠し蔵への潜入を成し遂げた。

ここまできて考えにくいが、アナクロだが有効なブービートラップの可能性を警戒しつつ、広くない倉庫内を観察する。発見される確率を少しでも下げるため蔵自体の電源は使わず、両手が空くようにヘッドランプを用いての捜索だ。

水晶製の髑髏、蝋燭立てに加工された羊の頭蓋骨。ミイラ化した腕。

埴輪に似たものから指人形、操り人形、リアルな生人形。

装飾としての価値は低そうな、石のはまった指輪。鏡や曲玉。

そして、おどろおどろしい図画の記された巻物や、和綴じの古い冊子。

いかにも呪術的な意味のありそうなものばかりで決して気持ちの良いものではないが、厳重に隠蔽されていた蔵の中身としては拍子抜けだ。

法に触れるような武器もないわけではないが、近代的な銃火器の類は一切見あたらない。密教の仏具に似た金色の武具、多数に枝分かれした青銅の剣、見たこともないような文字や生物の姿が多数彫り込まれた弓などはあったものの、いずれも実用に耐えるとは思えない。免許次第で保有できる狩猟用散弾銃やライフル、その弾丸すらない。

小さな壺に入った液体や紙で包まれた粉類は散見されたが、色や臭いはどれも彼の知識にある違法薬物の特徴とは合致しない。無論偽装の可能性は否定できないが、町の売人レベルならともか

く、違法薬物の取引の規模としてはどれも少量すぎる。
素人の荒家に美術品の価値の判断は難しいが、少なくとも金塊や有価証券といった分かりやすい高価値品は見つけられなかった。裏金庫というわけでもなさそうだ。
こんな所蔵品だけなら通常の蔵で十分だ。何故隠されていたかすら疑問に思える。
それでもいくつか判明した事がある。矢車家の二つ名、呪いの矢車とは、例えではなかったと言うこと。近代になって新たに追加されたという新斗流三家のうちにさえ、専門に呪術を扱う者がいたわけだ。
そしてもう一つ判明したこと。あらゆる所蔵品にはボールペンでアラビア数字の記された付箋紙が貼り付けられていた。紙の色、インクの様子から見てここ一年以内に貼られたものだろうから、これら奇妙な品々は現在でも管理下に置かれている事になる。蔵以外のどこかには詳細な目録が存在するのだろう。
より優先すべき第一目標を果たすべく、書物類の内容の確認に入る。
詳細に読み込んでいる暇はないが、〝鬼〟に関する記述が多い。特に〝星鬼〟と名付けられた一群の鬼については、その名前・性質・有効性の期待できる対処法に至るまでおそろしく詳細な記述が為されている。凝りすぎを通り越していっそ病的とさえ感じられるほどだ。
記述には自衛官の間で囁かれていた〝鬼〟の戦場伝説と奇妙に合致するところもあり、薄気味悪さを覚えさえするが、その出所がここであろう事は間違いないだろう。目的は分からないが、あるいは斗流によって意図的に流布された噂かもしれない。
が、余計な情報ばかりで肝心要の雪女にはたどり着かない。このままでは手ぶらで帰ることになる。
沸き上がってくる焦りを瞬き三回のスイッチで封じ込め、改めて書棚を俯瞰する。
すぐに違和感。先ほどは気付かなかったが、一連の書物の付箋番号が飛んでいる。
なるほど。
扉のすぐ脇の小棚を探ると、案の定だ。抜けていた巻が出てきた。
大方、正規の保管場所に戻す手間を惜しんだのだろうが。最近になってこの記述が再確認されたという状況証拠でもある。ここは担当者の不用意さに感謝しておこう。
これまた案の定、妖魅〝雪女〟についての項が含まれている。内容を読み込んでいる暇はないので手早くデジカメで取り込む。
不完全ながら第一目標を達成したと判断される。これ以上の長居は無用だろう。まだ猶予はあるはずだが、証拠を残さぬように撤収する事にする。
蔵を抜け出した直後に、背後から銃を突きつけられた。
次の瞬間には前後左右を囲まれている。
全員がガスマスクを装着しているところをみると、すべて筒抜けだったとみえる。
あの阿呆め、中途半端な仕事をやったか。
いや、他人のせいにはすまい。そもそも見よう見まねでは不十分だったのだ。
彼を囲んでいる自動小銃の黒服達は、噂に聞く宮藤のお庭番ど

もか？

古来より斗流の守りを担当する一族とは聞き及んでいたが、表向きに流布している忍者かぶれの時代錯誤な青年団とは似ても似つかない。

もはや認めねばならないだろう。斗流十家はただの一地方豪族等ではない。暴力団的な私兵団とは一線を画した、なまじの軍隊以上の組織を備えている。

荒家は目的を確認させるために泳がされていたといったところだろうが、もうその理由もなくなったということか。

「困った事をしでかしてくれましたね、荒家行晴先生」

黒服の内でも頭一つ以上抜きんでた、やたら長身の青年が荒家の前へと進み出た。ガスマスクを外して素顔を露わにする。

その浅黒い顔には憐れむような色が浮かんでいる。

「失礼。お初にお目に掛かります。私は芳村黒男。樒の頭を拝命しております」

態度はあくまでも慇懃だが、全身から抜き身の刃物のような危険さを漂わせている。

まったくもって生意気な若造だが、こいつは本物だ。甘く見ることは出来ない。

わざわざ顔を見せたと言うことは、生かして返すつもりはないという事か、あるいは交渉の余地があるという事か。

後者であってくれればむしろ好都合、一足飛びに目的に肉薄できる可能性がある。

「降参だ。煮るなり焼くなり好きにしろ」

「よい判断です」

と芳村は一礼し、身振りで武器を下げさせる。部下の統制も見事なものだ。

「ここまで自力でたどり着かれるとは、脱帽を通り越して呆れるしかありませんよ。さすがはもと第一レンジャーユニットの精鋭。その熱心さに免じて、こちらも腹を割るとします」

意味ありげに言った。

「腕の立つ味方は、多ければ多いほどいいので」

芳村が語った内容は荒家の常識を大きくぐらつかせ、かつ彼の疑問に解答を与えるに十分だった。

超常的な現象を一手に扱い、一般市民の目から隔離し、時にはそれを振るって国家を護る。それが神代の昔よりこの国を陰から管理し続けてきた組織に与えられた使命であり、斗流十家こそがその根幹だという。

容易く諸刃の剣となりうる危険な知識を民の目から隠蔽し、いざ必要とあらば自らの身を犠牲にしても断固としてそれを行使するというその理念は、近代の人権思想とは多分に相容れぬところがあるものの、古代の為政者のなしようとしては十分に立派と言ってよいだろう。

このふざけた話が真実であれば、の話だが。

いっそ締め上げてやりたいところだが、語る芳村青年の表情は真剣そのもので。

何より、ここまで非常識で説得力のない説明をする意味が乏しすぎる。単なるおふざけとしては手が込みすぎだ。

そうした組織の存在は自衛隊の陰の部分で囁かれてきた噂とも合致するし、荒家自身も超常としか言いようがない経験は数多く経験している。

「樒にようこそ、雪崩神（アヴァランチャー）。」
その二つ名まで知られているとは……
「よろしくと言っておくしか、なさそうだな」
こうなってくると、あの事件さえも彼をスカウトするための計算ずくだったのではないかという疑惑が沸いてくる。今さら気付いても後の祭りだが。

ヒョウタンから駒とでも言うべきか。斗流の深奥に組み込まれてしまった事で、雪娘なるものの正体に一気に迫る事が出来た。
斗流の一員となった事で正式に出入りを許された宝物庫の書物についても改めて調査を行い、認識の甘さを痛感した。
雪娘とは昔話になぞらえて疎まれ排斥されるだけの概念ではない。熱量を操るという生まれついての特殊能力の一種であると同時に、命に関わる特殊な病の一種と見なすべきだと理解した。
昔話に語られている雪女こと、雪と氷の女神〝天陸花媛命（あまのりくかひめのみこと）〟は、有徳の高僧ならぬ斗流の先人達によって約千年前に珠古山に封じられたという。その陸花媛は永遠の氷の柱と石造りの玄室に閉じこめられて活動停止状態となっており、滅ぼさずに肉体ごと封じることが魂の転生に対する備えともなっているため、彼女自身が再び顕現して人に祟ることはあり得ない。
だが、本体とは半ば独立したサブの魂とでもいうべき要素、枝（えだ）魂（だま）が封印を免れて漏れ出し、新たな肉体へと転生する事までは防げなかった。
オカルトな理屈や用語の正確性は専門外の荒家にはよく分からないが、珠坂の地に生まれてくる雪娘達は陸花媛の分身という理解で良さそうだ。
ここで問題となってくるのが、神力を発揮するには不完全な人の身ゆえ、雪娘はオリジナルの陸花媛以上に制御能力を欠いた不安定な存在だという事だ。
雪娘の成長にしたがって陸花媛との同期は進んでいき、熱を操る力は増してゆく。そのため、能力の暴走の果てに自らを滅ぼしてしまうのが雪娘の運命だとか。
ここ三百年の統計によれば、雪娘がそうと判明する最初の能力発現時に落命する可能性は、実に四割にも達するという。
もちろん斗流とて座視していたわけではなく、雪娘の能力を抑制するための手段を開発し、雪娘と分かった少女にはそれなりの処置を施している。
だが、現在彼らが保有する最も強力な呪術を用いたとしても。タイムリミットは早ければ十歳。遅くとも十四歳にはは爆発的な自然発火あるいは凍結現象を起こし、家族や近しい者を巻き込んで大規模な被害を及ぼす可能性もまた相当に高い。
そこで雪娘と目される少女を組織で保護・隔離する。同時に、情報操作によって社会が彼女から距離をとるように仕向ける。科戸に対する態度の背景にあったのは、そういう事情だ。
斗流は千年以上にもわたって、そうやって雪娘の脅威に対応してきた。
だが彼らは、抜本的解決の可能性から目を逸らしているのではないか？　そう思えてならない。
荒家が見たところ、彼らは雪娘への対処に汲々とするばかりであり、既に手段が目的と化している。
呪術の開発を一手に担当していた矢車家が滅んでしまったため、

ここ百年ほどは封印術の改善も進んでいないようだ。
それこそ、ダラダラと存続しすぎた組織の動脈硬化が進んでいる証拠ではなかろうか。

一方で、斗流という組織の中には異様な柔軟性を与えられている部分もある。
禁断の知識のもたらす強大な権力と武力の統制には、それだけの恐怖を示し続けることが必要であることは間違いなく、ゆえに斗流は過去も現在も裏切り者の存在を許しはしない。
闇の知識の防波堤として自らが民の盾となり剣となろうとする崇高な理想は時代を経るにつれ失われ、ついには力に魅入られ組織の屋台骨を揺るがさんとする者が必ず生まれる。それを見越した斗流の創始者達は、陰の中にさらなる陰の部分を作ったという。
粛正部隊たる樒(しきみ)は相互監視し合う三群の力のバランスによって自己統制され、芳村のついた頭の座もまた安泰ではない。そればかりか、その権限は宗家に対する処断すら含むものだ。
本来安全装置としての粛正組織の中から突出した新川家が、ついには本流の宗家に取って代わったというのは歴史の皮肉だ……というのは蛇足か。
つまり荒家はまたも日陰要員としてスカウトされた事になるが、そんな裏方であるからこそ可能な事もある。
誘ってくれた芳村には感謝せねばなるまい。

皮肉な話だが、人に避けられているターゲットが一人きりになるチャンスはすぐにやってきた。

タイミングを見計らって歩道に車を横付け、下校中の雪娘を有無を言わさず引っ張り込む。所要時間五秒弱。
「きゃー人さらい！」
「失敬だな。相変わらず人聞きの悪い」
「いやいや、今まさにリアルタイムで犯罪行為に巻き込まれつつあるんですけどー！」
助手席に押し込んだ荷物が、何か言いたげにしている。
「緊急避難措置ゆえ苦情は受け付けん」
「無茶苦茶だコノヒト……あのー。苦情以外なら聞く耳ありますー？」
「協力的になる気があるのならな」
「目的を説明してはいただけるんでしょうね？」
もう声が落ち着いてきた。
この状況で、なかなか適応力があるな。
「ああ、これからお前の状況をナントカしようと思ってな。俺に考えがある」
「は、はぁ？」

四駆車を駆り、深夜の雪道をひた走る。
目的地の珠古山は珠坂市の裏山群の最高峰にあたり、古来より入山を禁じられている。無論、見る者が地図を見れば適した登山コースはある程度読み取れる。素人を伴っていることを考慮すれば南面のコースを使うのが筋だが、斗流の裏をかきつつも万が一の追撃を考慮するならば、嘴山の登山道から入って途中から北面に回り込み尾根伝いに辿っていくのが最適だ。
助手席には簀巻きを脱した雪娘が一人。

「もう、信じられません」
「俺もなかなか信じられなかった。だが、真実だと考えざるを得ない証拠が多すぎる」
「あー、いや、そうじゃなくて。私が言ったのは、荒家先生のやってることです」
まだ混乱から回復しきっていないのか、毒気を抜かれたような表情。判断力も低下しているとみえて、言葉の切れ味が不足気味だ。
「あれだけ迷惑だって言ったのに、手を引くどころかそんな危ない組織にまで深入りしちゃってたなんて。どういう思考回路してるんですか」
「社会的立場や他人の都合を斟酌する気はないんでな」
「そういうのが先生の考える大人なんですか？」
訝しげに突っ込み。本来の彼女の切れ味が復活してきたようだな。
「同じミスを繰り返さないよう努力するのが大人だ」
「……人に歴史ありってやつですか」
「十三やそこらの小娘が歴史とか言うな」
十数年の命でも生まれ変わりを含めれば相当の歴史を重ねてることになるのかもしれないが、そんなものはただの空回りだ。何の経験にも成長にも繋がらない。
「もしかして、娘さんグレてたりとか？」
「生きていれば十八になる」
「は？」
「インフルエンザをこじらせて、あっさり逝っちまったよ。仕事で地元を離れてる間にな」
「え、え？」
「それで妻は愛想を尽かして出て行った。国を守る仕事につきながら自分の家族も守れなかったとはお笑いぐさだ」
「……うそ……」
絶句する科戸。
「無論嘘だ」
「嘘なんかっ!?」
「ああ、嘘だ」
「……このおっさん、どこまで……ああもうっ！」
頭を抱えてうめく雪娘。かなり珍しいものを見ている気がする。運転中なのでじっくり観察できないのが残念だ。
「こっからは真面目な話限定。悪質な冗談は抜き。オーケー？」
と、据わりきった目で凄まれた。
職員室前でくってかかられた時のような怒りの表現とは異なるが、それでもこめかみがチリチリするぐらいの迫力がある。
「了解だ」
そう言わせておいてから、改めて質問をぶつけてくる。
「先生は、何でそこまでして私に構うんです？　立場が悪くなりますよ」
立場で済むなら御の字だろうな。
「愛と正義のため、とか格好いい事を言いたいところだが。そんな立派なもんじゃないな。せめて一つぐらいは何か成し遂げたいからかもしれん」
「はぁ？」
「この町の連中がそれなりにお前さんを気にかけてる事は認める。だが消極策と安全策と妥協策だけだ。同情はあっても、真剣にお

前さんを救いたいって意思が感じられん。だから俺が何とかしてみたいと思った。そんなとこだ」
はぁ。とわざとらしいため息をつかれた。
「……物好きすぎます。せめて下心とでも言ってくれた方がまだ説得力ありますね」
「説得力、ねえ」
横目でちらりと見やり、ため息をつきかえしてやる。
このやせっぽちの少女をそういう対象として見るには、かなり努力が必要だ。
「気を悪くしていいですか？　いいですよね」
「どう思ってもらっても構わんが、ともかく俺の人生はお前さんに一点張りすることに決定した。だから邪魔だけはしてくれるな」
「人生かけて押しかけヒーロー志願されても……重すぎるんですけど」
「科戸にリスクを負えとは言わんよ。安全は命にかえても保証する」
「だから、そういうのが重いんですってば」
言われても、荒家にはどうしようもない。答えずに黙っておく。
しばらくの沈黙を破ったのは科戸。
「さっき、嘘だって二回言いましたよね、先生」
「そうか？」
「言った。間違いなく」
「そうか」
「そうですよ」
いちいち細かいことを気にする娘だ。
またも沈黙。
「ねえセンセ」
「ん？」
「趣味に付き合うのはいいとしても、結局は世話になりっぱなしみたいで心苦しいじゃないですか。だから何かご褒美とか用意してもいいかなって思ったりもするんですよ」
おかしなイントネーションで呼びかけてきた科戸が、妙なことを言い出した。
「独りじゃ寂しいと思うし、私がセンセのお嫁さんになってあげてもいいかなーって」
くっくっ、とからかうように笑う雪女見習い。
いきなり何を口走るかと思えば。さすがの荒家にもこの反応は読めなかった。いくら何でも飛躍しすぎだろう。
せめて養女ぐらいにしておけと突っ込みたかったが、荒家自身未来の話をしたい気分でもあったので。
「三年後まで覚えてたら考えないでもない。あまり期待しないで待つとしようか」
と答えてみたところ、
「そっちからお願いさせてあげるから。ちゃんと覚えてなさいよ」
憮然とした科戸に捨て台詞よろしく宣言された。
どうやらこの少女、意外にもノリのいいふざけた性格をしているようだ。
これが本性かどうかはともかく、なんにせよ笑顔が出るようになったのはいい傾向だと思いたいところだった。

さて、これでようやく話が追いついた。

現在、荒家は科戸芙柚とともに珠古山を目指している。
正確に言えば、目標は山頂。そこに封印されているという古代の雪女にして雪娘のオリジナル、天陸花媛命。
斗流が雪娘の暴走に対する対処法を模索し続けているのは確かだ。その努力は認めるが、あくまでも姑息的な手段だと思える。
雪娘の悲劇を引き起こしている根本的な原因はといえば、力の本来の持ち主である陸花媛が封印されている事ではないか。
確たる根拠もなく守株を決め込む連中は、荒家がその可能性を匂わせるだけで震え上がった。それだけでも、世界の安定を望む斗流斗流上層部が乗り気でないことは十分想像がつく。
彼らにしてみれば命の代価として組織に取り込まれる事を選んだはずの荒家が、宝物庫を破っただけではあきたらず珠古山の禁域さえ破らんとしているという事実は十分粛正に値する暴挙であろう。
だが荒家に言わせるなら、一人が確実に不幸になる世界などくそ食らえだ。その不幸が本来なら皆で分かち合うべきものなら、なおさらだ。
ならば、不幸をもたらすという雪の女神を目覚めさせ、世界をあるべき姿に戻してやろう。
呪術など専門外もいいところで確信があるわけではないが、陸花媛の分身である雪娘が封印解除に一役買うであろうぐらいは想像がつく。座して滅びを待つぐらいなら、わずかな勝算にでも賭けるのは当然だ。
だが。荒家達が禁域にたどり着いたならば。その過程において、おそらくは成功の如何によらず、何らかの超常的な現象が大衆の耳目を惹きつける可能性がある。なにしろ古代の怪物やら呪術やらだ。何が起こっても不思議ではない。
それは情報の秘匿を重要視する斗流にとっては最優先で阻止すべき事項であり、相応に強硬な手段をとってくるのは予想できた。事実、芳村率いる樒は今この瞬間もじわじわと二人に迫りつつある。
幸いこれまではなんとかその追撃をいなす事が出来たが、完全に振り切ったり必要以上に被害を与えて彼らを追い詰めてしまえば……追撃者は人払いの技を身につけた者達だけでは済まなくなる。軽率な投入を手控えられている本物の鬼斬り、その身に降ろした鬼の力をもって鬼を葬るという、これまでの相手とは桁違いのバケモノどもが出張ってくる可能性がある。それが噂であれ真実であれ、余計なリスクを冒すべきではあるまい。

しかしこうも簡単に捕捉されるとは予想外だった。
情報漏れには細心の注意を払い、仕掛けるタイミングも選ぶコースも十分に裏を掻いたにも関わらず、粛正部隊たる樒の反応はきわめて迅速だった。
樒が最初から彼の裏切りを予測していたなら即座に取り押さえられていたろうし、初動にさえ成功していれば何の妨害も受けずに目的を遂げられる筈だった。
あれだけの装備の人数を動かすにはそれなりの時間が掛かる。素人の少女を連れて速度が落ちている事を計算に入れても、コースの欺瞞策も含めればそうそう追いつかれるわけはない。一瞬の迷いもなく一直線に最短コースを追ってきたとしか考えられないタイミングだ。
何らかの手段で彼の居場所を把握していたのだろうか。発信器

が無い事は何度も確認している。上空を航空機が飛行していた事実はなく、偵察衛星の通過タイミングも考慮済みだった。

元自衛隊員としては完全に足取りを消したつもりだった。それでなお捕捉されたとすれば、彼の知っているのとはまるで異なった手段の存在を疑わねばならないだろう。

そう考えてみれば、心当たりが一つある。

闖入者である荒家を許し、仲間として迎え入れるにあたり、樒を率いる芳村が出した条件がある。

決して裏切れぬような保険をかけること。

彼が〝三尸（さんし）〟と呼ぶ、ビー玉ほどの小さな陶器の球のようなものを呑まされた。人間の心臓の下に取り憑くという伝説の虫の名だが、伝説そのものではないにせよ呪術的な何かであろうことは間違いない。

事実、珠古山の禁域に踏み込んだ瞬間に落雷のような突然の頭痛に襲われてより、酷い頭痛に苛まれ続けている。苦痛に対応する訓練を受けていなければ、今頃は山から逃げ出すしていたに違いない。

理屈はともかく、三尸とやらはいわば孫悟空の頭の輪のような役割を果たすのだろう。ただ苦痛を与えるだけでなく、裏切りを知らせる発信器のような機能も同時に備えているとすればこの状況も説明できる。

なるほど、道理で新参者に対する警戒が甘いわけだ。

だが。訓練された人間の能力を甘く見てもらっては困る。

§

「なんて奴でしょう。三尸の与える苦痛に耐えつつ、素人の娘一人連れてなお、我々をこうも手玉にとるなんて」

稼働人員が半数を割った報告の直後、直属の部下の一人である石丸が感嘆の声をあげた。

敵への賛辞と言っても良い内容を口走ってしまった事に気付き、慌てて口をつぐむ。

「いえ、失礼しました」

「いや、俺も同じ気持ちだ」

芳村黒男は部下の言葉を肯定する。

こういう言動は指揮官としては失格かもしれないが、優れた技能を美しいと感じそれに惹かれることは、人としていたって自然なことだ。

「本当にこの冴えないおっさんがとも思ったが、さすがは第一レンジャーユニットにその人ありと恐れられた人物だ。アヴァランチャーの異名は伊達じゃなかったという事だな」

「それに、まだ一人も殺していない」

黒男の傍らで、ひょろりと背の高い娘が補足した。

まったく、平然と嫌なことを言うやつだ。

見た目はまるっきり文系女子大生風のこの娘が、矢車の再来と呼ばれる呪術の天才とは誰が信じようか。

右手に持っている飾り気のない黒い棒こそが彼女の魔法の杖らしいが、そう説明されても普通は納得できないだろう。せいぜいが金剛杖の代用品にしか見えない。

黒縁の眼鏡、三つ編みにした稲藁色の髪、身につけているのはジーンズにパーカー、肩から提げているのは布製のトートバッグであるから、場にそぐわず浮いているというレベルではない。雪

山でこんな格好をしていては普通に命に関わる。
だが彼女は、秋服に包んだだけの肉の薄い身体を吹き付ける冷風にさらしつつも平然としている。そればかりか、スニーカー履きの足は一メートル以上も降り積もった深雪にめり込むこともない。かんじきやスキー履きの男達を尻目に、足跡も残さず新雪上を歩いているのだ。
目を疑うような異様な光景だが、これこそが彼女のずば抜けた才能を端的に示していると言えるだろう。
滅び去った矢車家の蔵に残された正体不明の道具群を調査分類し、本来の強力な呪具として再び斗流の手に取り戻したのも、作成法の失われた三尸を現代に再現して見せたのもまた、彼女の仕業だった。
実を言えば、黒男や樒のメンバー達が身につけているかんじきやスキーも彼女の手による新造マジックアイテムなのだが、効果はと言えばめりこみを軽減する程度でしかない。消費できる魔力量の限界を考慮してその程度に設定されているのだ。呪術を使い慣れぬ者が彼女と同じような真似をすれば、魔力を吸い尽くされて十五分かそこらで気を失ってしまう。
斗流期待の新世代の一員にして、樒の相談役、後藤志摩（ごとうしま）。
彼女の貢献がなければ、こんな雪山で本職を追いかけようなどとは思いも寄らなかったろう。
「そうだな。志摩の言うとおりだ」
背筋が寒くなる。
罠をしかける余裕がなくなるまで距離をつめた結果、先ほどから荒家が用いているのはライフルと擲弾筒だけだ。しかも決して直接黒男達に向けられることはない。
だがそれでも十分に脅威だ。射程距離と起伏による遮蔽を考慮しつつ追跡している筈の一個中隊が、たった一人にきりきり舞いさせられている。
なにしろ、射程外からの一射にて数人ずつが脱落するという点では、直撃より被害が大きい。
彼が使っている手段はといえば小規模な人工雪崩の誘発である。要所に打ち込まれた一弾が斜面上の雪のバランスを崩し、コントロールされた雪崩を巻き起こすのだ。これこそが雪崩神（アヴァランチャー）の異名の所以。
大きな雪崩の中で人間が生き残ることは難しいが、追撃を断念する程度のダメージを与えつつ死なない程度の絶妙な破壊力を与えられているのは、ひとえに荒家の腕による。
まさに神業と言わざるを得ない技術だが、本当に恐ろしいのは一見追い詰められつつあるように見える立場でなお、手心を加える余裕を残していることだ。
それは、必要とあらばいつでも皆殺しに出来る、その裏返しとも言える。志摩が〝まだ〟という言葉を使ったのはそういう意味だろう。
新川から受け継いでよりこの方、黒男と樒は何度となく修羅場をくぐってきた。人でないものと対峙した事も二度や三度では効かない。
樒は粛正部隊としてよくその役割を果たし、時に本物の鬼斬りとさえ渡り合い、人の身で勝利を続けてきた。
生まれつきの特異な才能によるところの大きい鬼斬り達は戦力として計算できない。人に憑く鬼を利用して人間離れした力を発揮する彼らは不安定で、いつ何時敵に回ってもおかしくないから

だ。
新川家が樒を託した意を、黒男はそのように酌んだ。自らが為すべきは鬼に頼らぬ体制を確立することと理解し、そう努めてきた。志摩の呪具を借りることを決心したのもそのためだ。
斗流人払いの儀は人の群れをしてよく鬼に対抗しうる技術を与えると信じ。いかな鬼使いや鬼憑きであっても、ただ一人のバケモノは訓練された人のチームに勝利し続けることは出来ないと、それを証明し続けてきた。
だから、彼が心血を注ぎ込み鍛え上げてきたその樒が、ただの一個の人間にここまでしてやられる事に驚きを禁じ得ない。
いや逆か。ただ技能を局限まで磨き上げた一個の人間だからこそ為し得たことかもしれない。
狩人が熊に勝てるのは熊が弱いからではない。自らの弱さと限界を知り、それを補う努力を尽くしているからだ。種として与えられた性能のみで敵にあたる獣と、相手を研究しつくし、かつ存在のすべてで獲物に立ち向かう猟師のどちらに軍配が上がるのかは考えるまでもない。
これまた人の技術体系である呪術をもってして、生物として格違いの鬼憑きに対抗できる志摩を見ていると余計にそう思う。
「我々は彼の縄張りに踏み込んでしまったのだと思っていましたが、まんまと土俵に引きずり込まれたのかもしれません」
と石丸。
「その上情けまでかけられては立つ瀬がありませんが、腹が立たないのが不思議ですね」
それは別に不思議でも何でもない。
「こんなお気楽女子大生に命を預けていても腹が立たないのと同じだよ」
「お気楽って誰のことです？」
「人として尊敬の域に達してると言ってるんだ」
そういう事にしておく。
「私も黒男さん尊敬してますよ。それに信じてます」
信じられてしまったか。ガラス越しの視線が痛い。
「……はあ、ごちそうさま」
黒男よりさらに若いのに頭が切れる石丸はゆくゆくは樒を背負っていけるであろう逸材で、だからこそ極力そばに置くようにしているのだが。まだまだ思考が真っ直ぐすぎるな。今後の精進を期待しよう。
荒家は尊敬に値する人物とはいえ、今は利害の対立する間柄。敬意をもってうち倒すべき相手であり、この場においては彼らの命を脅かす強力な敵だ。
戦力を率いる者の嗜みとして覚悟だけはしているが、可能であるなら部隊から一人の死者も出したくはない。それが黒男の本音だ。
これまでは相手の隙をうまく突く事で圧倒的優位を保ち、結果として至上命題を成し遂げることが出来てた。
だが今回は残念ながら向こうの方が役者が上だ。力だけが強い獣相手ではない。局限まで鍛えられ研ぎ澄まされた本物のプロフェッショナル相手には小細工は通用しないだろう。事実、地の利を得た荒家は、樒の取り得る戦法から正攻法以外を完璧に排除する事に成功している。
さらに踏み込み荒家から手加減の余裕を奪うなら。その公算は飛躍的に高まる。手加減無しの雪崩の破壊力は彼らを一撃で全滅

させるに十分だろう。
この状況で荒家を取り押さえたいなら手段は一つ。部隊を分散させての飽和攻撃しかない。
対処できないだけの戦力を一気に叩きつけて手を回らなくさせる、すなわち人海戦術。
もっとはっきり言うならば……味方を倒させておいてその間に敵に肉薄する。いわば生け贄。
ここで黒男自らが率先して突撃するのは簡単だが、そんなものは指揮官としてはただの責任逃れだ。
自分の責任で部下を死なせる。それが出来ると信じている、と志摩は言ったわけだ。
買いかぶるのもいい加減にして欲しい。黒男の心はそこまで強くはない。
だが、そもそも粛正部隊なんて代物が道徳的であるはずがない。
これまでも何人もの裏切り者を葬ってきた。直接手を下さずとも、既に黒男の手は汚れきっている。
肩まで泥につかりつつ、頭に泥は浴びたくないなどとはお笑いだ。自らがまだ真っ白だと思いこみたいという、ただの甘えだ。
そんな黒男が部下思いの指揮官で居続けたいとは図々しい、そう言われてしまったのだ。
なんて嫌な女だろう。人の心の弱みを見事に見抜き、そこをずばずば突いてくる。
魔女だ魔女。こいつは骨の髄まで魔女だ。
そしてこいつは常に正しい。呆れるほどに真っ直ぐに黒男の弱みを追求し、さらけ出し、その上で肯定してしまう。
所詮男が女に頭が上がるはずがないのだ。きっと、未来永劫に。
この状況で黒男に出来るのは、期待通りに動く事だけではないか。
「……奴が山頂にたどり着いた瞬間が勝負だ。分かるな？」
「了解、各小隊に伝達します」
四方から襲撃可能となる山頂を包囲して、全方向から一気に攻め込む。
頂上につけば終わりではない。石塚と棺を破壊し、雪娘を陸花媛と接触させて封印を解除するには数分の時間を要する筈だ。
純粋な戦闘能力勝負なら、数名たどり着けばそれで何とかなる。
斗流の人員が何人死んでも、ひきかえに世界の安定さえ守ればそれで勝ちなのだ。
彼らはそもそも支配者にはあらず、世界のためのただの捨て石ではないか。
部下達もまた、そうした立場を理解した上でここに立っている。へたれた自分基準で勇士達の心意気まで疑い、結果として守るべき秩序を危機にさらすなど、それこそ恥ずべき所行ではないか。
腹は据わった。
命令の伝達を終えた石丸が、ふと口を開く。
「連中が目指してるのって、昔話の雪女の解放なんですよね」
「ああ。この状況から一発逆転を狙うなら、俺でも同じ事を考えるだろう」
「過去の不幸な出来事は、単に理解不足が原因って事はないんですか？　雪女がそういうものと分かってさえいれば、それなりにうまくやっていくことも出来たんじゃないかと思えてしまうんです」

彼の言うことは分からなくもない。黒男自身、小学校の自分には同じようなことを考えていた事がある。

「一理あるけど、それは流布された物語が真実を語っているとの前提ね」

と、志摩が一刀両断にする。相変わらず鋭い。

「では、実際には違うと？」

「この期に及んで口をつぐんでいても仕方ないから言ってしまうが、歴史上の陸花媛は物語のような可愛らしい代物じゃない。いわば擬人化された風雪災害、極めつけの祟り神だ。ちょっとした弾みで機嫌を損ねただけでも、東北から四国まで大寒波が覆い尽くしかねん。そういう怪物だと認識しておくべきだ」

「伝わっている物語は事実を下敷きにはしていても、あくまでも創作なの。気の毒な雪娘達への風当たりが強くならないようにという、斗流の先人による情報操作」

「……おい」

「へえ。斗流って冷酷非情な組織だと思ってましたけど、いいとこあるじゃないですか」

「そうかしら。辛うじて封じられているに過ぎない祟り神の分御霊を下手に刺激して本体を覚醒させる危険性を冒すべきではないし、逆に懐柔を試みておいて損はない。そういう計算。だからこそ一般人が畏怖と同情を覚えるように仕向けつつも、斗流自体は雪娘を保護する側に立っているの。そうよね、黒男さん？」

「どうしておまえは、十家当主と樒の司令官のみに伝わる口伝の内容を知ってる」

「現存する古文書の断片的な情報からの推理。大きくは違っていないと思うけど」

立場上、沈黙をもって肯定するしかない。

いつもの事ながら、呆れるほどの察しの良さ。策略家としても家政学部になんぞおいておくのは惜しい才能だ。

黒男自身、魔法使い（ウィザード）としての才能以上に、軍師としての彼女を買っている。

ついでに言えば見た目も悪くないので、身につけるものが大雑把なわりには、まあ華もないわけではない。飾り物としても一応合格点。

司令官が隣に置いておく人間としては、総じて極めて優秀と言える。だからこそこんな危険なところまで連れてきた。

ただ、会話していると精神的に疲れるのが難点だ。

「となれば、現状は非常に危険ですね」

「危険だと考えておいた方がいいでしょうね。封印状態の妖神の精神状態なんて毒ガス箱の猫も同じで、箱の外からは想像するすしかないから。ずっと瞑想を続けたおかげで意外と丸くなってるかもなんて、そんな風に期待するのはいくらなんでも希望的観測にすぎるでしょう？　ね、黒男さん？」

「……」

また妙な含みを持たせるな。どこまで知ってるんだこいつは。

「ともかく、我々は副精魂ですら人体に適合できないような、生物として格違いの存在を相手にしている。注意してもし過ぎと言うことはない」

「はい」

「ん」

「付け加えるなら、科戸自身にも不安要素がある。雪女の能力発現は精神的成熟の影響を強く受けるらしいからな。他人との交流

に乏しい環境が精神的成長に抑制的に働いていたとするなら、人生の先輩との親密な交流は、一気に時限爆弾の針を進めかねん」
「命懸けで雪娘に与えようとしているものこそが最悪の猛毒とは、なんとも皮肉な話です。世界を想像した神様が本当に居たとしたら、そいつの性格の悪さを糾弾したいところですよ」
「俺も同意見だが、それを斟酌できないのが我々の立場だ。辛いか」
「いいえ。それがどうしても必要で、誰かがやらねばならないのなら。自分がやります」
「よし」
辺りを見回す。会話に参加していなかった樒の戦士達もまた、黒男の視線に頷きを返す。
「先ほどの命令に追加だ。隊員個々の判断で構わん、すべての責任は俺が負う。科戸芙柚嬢の暴走あるいは天陸花媛命の覚醒が不可避と判断された場合においては、科戸荒家両名および陸花媛に対する直接攻撃、またあらゆる銃火器・呪具・術式の使用を解禁する」
その場合ははなから荒家は生きてはいないだろうが。
「荒家行晴氏が暴走した場合、も追加ね」
「……あり得ると？　あの冷静な人物が？」
レンズの奥に真剣な光をたたえ、志摩が頷く。
「躊躇してたら、全滅するわ」

§

果たして、黒男の危惧は現実のものとなろうとしていた。
「……センセ、降ろして」
科戸の要求に応え、シートと毛皮を敷いた雪上に身体を横たえてやる。
顔が赤い。
「疲れたか？」
少女は荒い息の中、ぎこちなく首を横に振った。
その身には脱力ではなく緊張が宿っている。懸命に何かをこらえるような表情で、ギリギリと歯を噛みしめ、自らの身体を抱くように震えている。
荒家の目には、何らかの衝動のようなものと闘っているかのように見えた。
小さな身体に負担を掛けぬように十分配慮していたはずだが、そのような問題ではないのはすぐに分かった。詳細を知らぬ荒家の目から見ても、科戸の状態は明らかに異常だった。
異常は今に始まったことではない。ここまで来るまでの間も異変は進行していた。背に負った少女の身体は、毛皮越しでも火傷しそうなほどの高温を発したかと思えば、三十秒後には氷の塊のようになった。
これほどの体温の乱高下はただの病ではとてもあり得ない。超自然的な力が働いていることは間違いなかった。
今も、荒家が感じる気温はどんどん下がっているのに、少女の周囲の雪だけがシュウシュウと湯気を上げている。
コントロールが効かなくなっている。やはり限界が近いのか。
「あと少しで山頂だ。苦しいのは分かるが、もう十五分だけ頑張れ」
科戸の体調は山頂に近づくほど急激に悪化している。あるいは

陸花媛本体との共鳴のようなことが起こっているのかもしれない。
同様に荒家体内の三尸の与える苦痛も増しており、敏捷性も判断力も随分と鈍っている。訓練を受けていない人間では既に発狂しているレベルだろう。
この状況での激励が酷なことは分かっている。だが、ここが最後の踏ん張りどころなのだ。
「ううん、もういい。もうやめよ」
「だめだ科戸。諦めるのは早い。時間はまだある」
「センセも苦しいんでしょ？　もういいんだよ」
「俺ならまだまだ耐えられる！　陸花媛はすぐそこなんだぞ！」
「ううん」
科戸芙柚は首を振り、微笑んだ。
「こんな事してもだめなんだよ。私達だけじゃ封印は解けないんだって、今ははっきり分かる。ううん、たぶん最初から分かってた」
「！」
「言い出せなかったんだ。嬉しかったから。センセが私の事を最優先に考えてくれてるのがわかったから。こうしてる間は、センセを独り占めできるって思ったから」
「……科戸……」
「今日一日、私だけのセンセで居てくれた。それで十分」
「そりゃ欲がなさ過ぎだ。だいたい、三年後におれにプロポーズさせるんじゃなかったのか」
「あはは、三年どころか三分も無理っぽいや」
「苦痛に耐えるにはいくつかコツがある。いいか、まずは呼吸と心拍を意識するんだ。それから、」
続けようとするが、手で制された。
「自分のことは自分が一番よく分かるよ……最後に一つだけお願いがあるんだけど、センセ聞いてくれる？」
「……ああ」
「わたし、このままだとセンセを殺しちゃう。お父さんとお母さんみたいに。それだけは嫌だな」
少女はふもとの方向に目をやる。
「それに、さっきから追っかけてきてるのって芳村先輩と後藤先輩でしょ。いつもこっそりと気を使ってくれたから、巻き込みたくないんだ。だから……」
無理に冗談めかした調子は既に消え去っていた。
灰白色の瞳で荒家を見つめ、雪娘は静かに希望を告げた。
「私を、殺してください」
あまりといえばあまりの申し出に、荒家は絶句するほかなかった。
「恐がりの弱虫だから自分じゃ死ねそうにないし。先生なら、痛くなくできるでしょう？」
確かにそうした技術はある。だが問題はそこではない。
「……ジョークにしては悪趣味すぎるぞ」
雪娘は首を横に振る。
「本当にもう保たないの。このままだとみんな死んじゃう」
能力の暴走により発生する大量の氷雪は二人を引き裂き氷に閉ざすだけでなく、大崩落の核となって追撃者達をも全滅させるだろう。あるいは、爆発的な自然発火が科戸自身と荒家を焼き尽くしつつ、同じく大雪崩の引き金を引く。
科戸の言うとおりだ。熱い方と冷たい方のどちらに転んでも結

果は大差ない。全滅だ。
それを防ぐには、原因を排除するしかない。
だが、
「時限爆弾を処理するのと同じだから」
「同じなものか！」
そんな乱暴な理屈があるか。
「俺は殺し屋じゃない。人を育てるのが仕事の教師だ」
「出来るでしょ？　凄腕の兵隊さんだったんだし」
兵士とて別に殺したくて殺しているわけではない。戦闘で人が死ぬのは、ただ無力化を求めた結果であって決して目的ではないのだが。
それとも、先ほどからの荒家の姿は、教え子の目には殺人衝動に飢えた怪物のように写ったのだろうか。必要以上のダメージを与えないように配慮していたつもりだったのだが。
もし彼女には伝わらなかったのであれば、荒家は自らの未熟を悔やむ他ない。
「それにこんな無茶、センセにしか頼めないから」
ポーカーフェイスで通していた少女の声が上擦ってきた。いよいよ余裕が無くなってきたのか。
「……教え子を手に掛けろってのか」
「拾ったからには最後まで、面倒見てほしいな」
認めたくはないが、その通りだ。
すべてを諦め現状を受け入れていた少女に、叶わぬ夢を見せたのは荒家だ。今彼女を絶望を与えてしまった責任はすべて彼にある。
どうあっても命を救えないなら、せめて魂は救ってやらねばならない。
さらにこれ以上の負い目を感じさせてはならない。
それが唯一の救いで、彼女の望みであるなら。
この仕事は他の誰にも任せるわけにはいかない。彼の役目を全うせねばならない。
どれほど気が進まなかろうと、覚悟を決めるほか無かった。
「……センセ？」
すがるような瞳に頷き返してみせると、淑女をエスコートする騎士のごとく差し伸べられた手を取り、抱き寄せるように身体を引き起こす。
「ごめんなさい。こんな事させちゃって」
「いや。お前は怖くないか？」
懐に抱いた科戸の身体は燃え上がるように熱く。
「ぜんぜん平気。ありがとね、センセ」
頬へのキスは、灼けた鉄を押しつけられたかのごとく感じられた。おそらく本当に火傷を負っているだろう。
もはや一刻の猶予もなかった。
せめて傷を残さぬように。
目を閉じた少女の頭に両手をかけ一息に捻ると、嫌な感触が伝わる。
頸椎をずらすと同時に生命維持中枢のある延髄を一撃で断ち切り、荒家の腕は教え子に瞬間的な死をもたらした。
鼓動の停止とともに、少女の身体は急速に外気温へと近づいていく。
彼女が呪いから解き放たれた事を示す確かな証拠。だがそれは、

荒家が本来望んでいた形とは随分違っていた。
どこで歯車が狂ったのだろうか。もはやそれを考えることには何の意味もない。
だが、一つだけ明らかであったのは。
腕の中で永遠の眠りについた少女が、彼にとってはただの教え子ではなくなっていたと気付かざるを得なかったということ。
自らの娘の死を聞かされた時の何倍もの衝撃が荒家を打ちのめした。それは彼の魂をも旅立たせてしまうに十分であった。
異常な熱風と冷風が消え去り、奇妙な静寂が珠古山を包み。
空白の数秒の後。聴いた者の心を鷲づかみにするような慟哭が山々に響き渡った。

§

「遅かったか！」
樒の小隊長の一人は目の前で展開される光景に舌打ちした。
死者に魂を連れてゆかれた者はどうなるのか。
主たる魂を失った肉体にとり残された強い感情は、依り代を求める何かを引き寄せる呼び水となる。
「おおおおおおおおオオオオオッッッッッッッ！」
慟哭はいつしか咆吼へと変わってゆく。
血の涙は見開かれたまなこを緋色に染めてゆく。
かつて荒家行晴と呼ばれていた者が、怒りと絶望と衝動を体現するに相応しい姿へと変貌してゆく。
それはこれまでにも彼らが何度となく目撃した光景。
条件さえ揃えば、人は容易く別の生き物に、鬼へと堕ちる。

司令からの警告の通りだ。だが、想定より遙かに進行が早い。
陣形も装備もは対雪崩を優先していたため、近接戦闘に対応する体勢が完全ではない。
無線に怒鳴る。
「偵察小隊よりＨＱ。ターゲットの堕鬼現象を確認。Ｄ型、いや二腕四脚のＪ型。身長約二・八メートル、全身白毛で顔面は黒、雄鹿の角、三面あり。なお、ターゲットの左手には少女がとらえられている」
知らせを耳にして、黒男は瞑目する。
荒家が鬼に堕ちたのなら、その左手に握られているという科戸芙柚は既にこの世の人ではないのだろう。
雪娘の暴走は陸花媛の影響が強まる登頂後になると考えていたが、予想よりも随分早い。
いまだ暴走の様子がない事も合わせれば、結論は一つだ。
荒家は最後まで尊敬に値する男だった。それだけに、自らを許せなかったのだろう。だから鬼に堕ちた。
気の毒きわまりない。
が、感傷に浸っている猶予はなかった。
彼らにとって危機は去っていないばかりか、より一層の危険度をもって迫ってきている。
だが逃げることは出来ない。樒としてではなく斗流本来の仕事を為すべき時だ。
「了解した。もう雪娘への被害を考慮する必要はない。雪崩への対応は解かず、牽制しつつ後退しろ。総員で当たる」
強力な鬼への対応のため、矢継ぎ早に指示を送り、陣形の再編

を行う。
雪の斜面で、敵は安定性に優れた四脚、しかも高度の優位を得ている。
「よりによって三面鬼とは。悪路王や酒呑童子に匹敵する強敵だ」
いかに強靱な鬼の毛皮とはいえアサルトライフルならなんとかダメージは通るだろうが、強力な再生力を備えるという三面鬼に五・五六ミリでは何発当てても決定打となりえないだろう。ゆっくり放物線で飛ぶグレネードなど食らってくれるとは思えないし、対物ライフルなら有効そうだが、どちらにせよこの場で使っては大規模雪崩を起こしかねない。
強力な鬼を倒すには呪装武具で接近戦を挑むのが、危険も高いが最も確実なのだ。しかし今回は機動力で大きく差をつけられていると同時に、三面ゆえに背後からの奇襲も難しい。
厄介な状況に加えて厄介な相手だった。
だが、指揮官としては制限の多い状況ほど腕の振るいようがある。我ながら困った性分だと黒男は思う。
徹底的に鍛え上げた精鋭がこの程度のハンデで破れるとは思わないが、完勝を成し遂げるためには一番の障害は、先ほどまで荒家に翻弄され続けたため部下達の心が折れかかっている事だろう。
面倒な置きみやげを二つも残していってくれなくてもよかろうに。
「あの御仁が裏切るとは信じられなかったが……やはり、とうに鬼に憑かれていたんだな」
「では、陸花媛の復活をたくらんだのは三面鬼だと？　でも何のために？」
小声でもらした黒男に、石丸が耳ざとく尋ねる。
「さあな。鬼の考えることなど分からんよ。だが、やつの行動がこの国を危険にさらし、ただでさえ短い科戸嬢の命をさらに縮めたのは確かだ」
白々しさに自己嫌悪を感じつつも、死者の名誉を守るような事を口にする。
最後まで利用するようで気分が悪いが、実際荒家はそのぐらいの弔意を示されてよいだけの人物だろうとも思う。
「俺はただの一連絡員だが、敢えて言わせてもらう！　これは弔い合戦だ！」
黒男の意をくんだか無線機をとり、らしからぬ力のこもった声で檄を飛ばす石丸。
「鬼に出し抜かれて英雄と守るべき市民を失い、さらにとり逃がしたとあっては斗流の名折れだ！　司令にかわり皆の奮起を期待する！」
一拍おいて。
おーっ！　という鬨の声が、鬼の咆吼とぶつかり合って雪山を震わした。声だけで雪崩が起こるのではないかと少し心配になったほどだ。
鬼を倒す鬼斬りさえも葬る最強の兵士達に火がついた。
これで負けはない。
樒の隊員達はじつに良く戦った。
腕力でも機動性でも強靱さでも人を遙かに上回り、一種の妖術を使いこなし、依り代となった荒家の知識をも得た鬼は、確かに恐るべきモンスターだった。これまでに黒男の樒が戦った中では

間違いなく最強の敵だったと言える。
だが、所詮鬼は鬼だ。生物としての基本性能の差には勝敗を決するだけの力はない。
人身として技をきわめた雪山のプロとしての荒家が敵であったなら勝ちはなかったかもしれないが、怒りと絶望に共鳴して荒家に憑いた鬼は、ただ攻撃衝動の命ずるまま目の前の兵士達に襲いかかっているだけだ。
どれほどの力と戦術の知識を備えていても、確固たる意思と目的がなければ、赤ん坊が泣き叫んで手足を振り回すのと大差ない。生き残るために全能力を振り絞る野生の生物にも劣る。
対バーサーカーシフト。そんな単純な戦術で十分だ。
見え透いた挑発に誘い出された鬼は、冷静な戦士なら気付かぬ筈のない死地へと追い込まれていく事になる。

三面鬼は荒家の残した激情を引き継いでいる。
「ああ、お前達を追い込んだのは俺だ。彼女を殺させたのも俺だ」
黒い顔を怒りにゆがめ、黄色い牙をむき出しに。三つの口が同時に咆吼する。
「掛かってこないのか？　ん？」
黒男は自らを餌に擬した。
周囲には何十人もの人の気配がある。武器を構え、雪中に潜んでいる。
これだけはっきりした罠が仕掛けられていれば、普通の野生動物なら逃走を図るところだ。
しかし戦術とは相手の行動を限定するもの。三面鬼は罠と分かっていても飛び込んでくる他ない。
そして、どれほど速かろうが重かろうが、どこに来るか分かっていれば、そんなものはテレフォンパンチだ。
黒男に飛びかかるのはすなわち特殊線維の網に突っ込む事であり、次の瞬間には動きの鈍った鬼の身体を八発の一二・七ミリ徹甲榴弾が貫くことになる。

「本当にいいの？」
黒男の気持ちを知ってか知らずか、志摩がまたも嫌なことを言い出した。
「安全確実に処分して、満足？」
からかうような口調だが、表情は真剣だ。
「きっと後悔しそうだなと思うのですけど」
安全確実な方法での勝利を目指すのが筋。指揮官先頭など無責任きわまりない愚行だと信じている。
が、
後を任せられる人間はいる、か。
「石丸、俺に何かあったら構わず全力攻撃を仕掛けろ。絶対にやつを逃すな」
「芳村さん⁉」
「どうやらこれはどうしても俺がやらねばならんらしい」
銃剣は現代戦においてはあまり実用的とは言えないが、槌のものは別だ。雷撃の呪術が施されており、ひとたび突き刺せば銃から分離して術式を解放、内部からダメージを与えられる。
巨大な相手の急所に武器を届かせるのが難しいなら、電気的に活動を停止させてしまえばよい。というわけだ。これをくらえば象でも一撃で心臓が止まる。

これまでも接近戦において何体もの鬼を屠ってきた優秀な武器であり、脆弱な人間相手には効率が悪すぎるが、異常に強靱な肉体を持つ鬼を倒すにはこれ以上のものはない。

ちなみに、この術式を銃弾に込められるなら言うことはないのだが、量産して長期的に安定して品質を保つようにするのは難しいというのは志摩の弁だ。

が、その志摩は黒男から離れるどころか、ひょいひょいと新雪を踏んで傍らに立つ。

「おまえも下がってろ。やっこさん、そろそろ我慢できなくなってきたぞ」

「いいえ、私も後悔したくはないので」

稀代の呪術師は本来の得物である杖を雪に突き立てると、黒男の手をトートバッグに誘った。

「はい、つかんで、引っ張って下さい」

棒のような手応えを感じて手を引く。バッグの中から姿を現したのは、本来なら収まるはずもない長さを持つ一本の剣だった。

柄も刃も漆黒の両手持ち両刃剣。複数の枝を持つ刀身上ではルーン文字が赤く明滅している。

この状況で出てくるのだから、いずれ名のある名剣魔剣の類だろうが、斗流人払の呪術師の持ちものとしてはかなり違和感がある代物だ。

しかし。

初めて見るはずの武器に奇妙な既視感を感じてしまうのはなぜだろうか。

「申し訳ありませんけど、ちょっと前借りです。黒男さんを守るためならこの娘も納得してくれるでしょうし」

黒男はいつしかライフルを手放し、両手で剣を構えていた。

長さ・幅・厚みに似合わぬ異様な軽さ。自らの腕そのもののようだ。

剣の柄に志摩が手を添えてくる。

「さあ、せめて私達の手で送ってあげましょう」

奇妙なことに、三面鬼は吼えるのも忘れ、ゆっくりと黒男の元へと歩み寄ってきた。

感情を感じさせぬ視線は剣の刀身に釘付けとなっており、まるで魅入られたようだ。

志摩の手に誘われるまま黒男が突き出した剣は、狙い過たず鬼の胸の中心を貫き。

刀身から吹き出したのはこまかな輝きの群れ。それは熱を発せぬ炎と化し、鬼の全身と雪娘の遺骸を包みこんだ。

憑いていた鬼の魂が焼き尽くされたのだろうか、荒家の身はいつしか人の姿に戻っていたが、それもつかの間。ほどなく二人の身体は光の炎とともに虚空に溶け去った。

檜の兵達のある者は瞑目し、合掌し、またある者は十字を切り。それぞれの信仰する何者かに、彼らの冥福を祈っていた。

まるですべてが終わったかのような光景だったが、黒男はそのようには割り切れなかった。

彼らの魂の行く先に、そんな幸せな未来はない事を知っていたから。

翌日。矢車家の宝物倉にて。

「志摩、どうしてここにいる!?」

「斗流宗家から出入り自由の裁可をいただいてますけど？　そもそもここは私のアトリエみたいものです」
　そういう意味で問うたのではないのだが。
「この時間は講義じゃなかったのか」
　しかしアトリエとは笑わせる。魔女っぽく苦い臭いのする怪しげなごった煮を作るぐらいが関の山だろうに。
「黒男さんこそ、お仕事さぼったそうじゃないですか」
「出社したところでお客様扱いだ。俺など居なくても問題なく回るさ」
　黒男の表向きの仕事は銀行員。
　まだ入社して数年の彼だが、不在時には頭取以下全員が彼をカバーする体勢となっており、まるで地方に出向したキャリア官僚のような立場にある。
　疑問に思う者も多いだろうが、それを誰も口に出さない。その方が出世できるからだ。
　重要な組織がすべて斗流の末端に繋がっている珠坂では良くあることだ。財界は四三家の管轄となり、芳村はその傍流に当たる。
　会社では旧家に繋がるボンボンなど腫れ物扱いで、多少顔を出さなかったところで詮索する者も小言をいう者もない。
　そんな黒男がまさか秘密粛正部隊の頭を張っているとは夢にも思うまいが。
「きっと一人で泣いてると思って来てみたら、案の定ですね」
「いや、泣いてないからな」
「でも心で泣いてたんでしょ」
「……なんでお前に心の中まで管理されにゃならん」
「こんなところで潰れられても困るから。ささ、私になんでも話してごらんなさい？」
　六つも年下の学生にお姉さんぶられてしまった。
　普通なら腹を立てるところだが、こいつはこういうヤツだ。
　人の心中にまで遠慮無しにずけずけと踏み込んでくるが、悪意がないことは分かっている。
　だからついつい心中を吐露してしまう。
「今回の捕り物に、一体何の意味があったのかを考えていた」
　おそろしく勘に優れたコイツに隠し事は通じない。妙なふうに詮索されて勝手に動かれるぐらいなら、素直に話した方がマシだ。
　床に胡座をかいた黒男の前に正座する志摩は、既にじっくり聞くモードに入っている。
「意味？」
「結果を見れば、荒家予備役三佐の介入が科戸の死を早め、俺たちはただ彼らを追い詰めて殺しただけだ。あの時はああ言ったが、あの技の冴えを見れば荒家三佐が終始正気であったのは明白だ。彼が暴走した原因はどこにあったと思う？」
「黒男さんがわざと決定的な情報を与えなかったこと」
　あっさり言い切りやがった。慰めに来たのなら少しは躊躇して欲しいところだ。
「どこで気付いた？」
「実のところ、呑ませた三尸を使えば荒家さんを殺すのは簡単だったんですけど。それが出来るか尋ねなかったでしょう？」
「なるほどな」
　つくづく察しが良すぎる。こんなに切れる娘だとは思わなかったが、才能の発露と同時に知的能力も急激に向上したのだろうか。それにしては学業成績に関して良い噂を聞かないのが不思議だが。

「私の成績のことはどうでもいいんです。それよりも黒男さんの告解の方を続けてくださいな」
話題が彼女自身のことに及びそうになると、こうして進路修正してくるな。
「心を読むな、それからシスターを気取るな……三佐を引っ張り込んだのは元はといえば宗家だ。だが彼が科戸嬢と雪女について探っていると知ったとき、二人が陸花媛に迫るんじゃないかと予感したよ。それを期待して宗家が動いたのではないかと勘ぐったりもしたな」
「そうならない方がいいとも思ったんでしょう？」
肯定の意味で小さく頷いてみせる。慰めてくれるつもりが無いわけではないのか。
「残念ながら、彼は本当に優秀だった。本物の兵士であると同時に本物の教師でもあった。俺たちが守るべき閾（しきい）を越え、道なき道に自らレールを敷きながら、一直線に破滅に向かって進んでくる。ここまでおあつらえ向きに動かれてしまっては、斗流に籍を置く者の一人としては準備を整えざるを得なかった」
黒男は言葉を切る。秘中の口伝をこれ以上口外して良いものか。彼女の立場を悪化させ、荒家のように窮地に陥れることになったりはしないか。
いや、それとも。それ以上に恐れているのは、この娘に軽蔑の目を向けられることか。
「荒家さんを止めなかったのは、芙柚ちゃんに同情した彼が思い切った行動に出るだろうと予測できたからですね。そこで止めてしまえば先細りのありふれた悲劇になり果てていたかもしれないけど、抜き差しならない状況に追い込まれた彼はドラマチックな終焉へとまっしぐら。いわばロミオとジュリエット計画とでも言ったところかしら？」
黒男が口を開かずとも、志摩の口が淡々と彼の罪を語る。
糾弾されているわけではないと分かっていても、辛い。
これ以上は、自ら話すべきだ。
「ああそうだ。危機的状況におかれて二人の心の結びつきが強まれば、科戸嬢が逝くとき荒家三佐をともに連れてゆく公算が高まる。それを期待して、俺は二人を見殺しにしたんだ」
志摩はその真意にすぐに気付いたようだ。さすがは天才呪術師といったところか。
「うーん、芙柚ちゃんは陸花媛の枝魂だから、彼女の虜になった魂は最終的には陸花媛に取り込まれると。それを考えれば、物語の雪女が人の心を吸うというのもあながち出任せってわけでは無かったんですね」
「神霊はそうして自らに心を預ける者を取り込んでさらに強大に成長するものだが、それには一つ副作用がある。わかるか？」
「取り込んだ魂の影響で、自己同一性を保持できなくなる可能性がある」
「その通り。斗流の先人はそれを利用することを考えた。凶悪無比な祟り神である天陸花媛命を人の温かさに触れさせ続ける事で、ついには人の守り神へと生まれ変わらせようという計画だな」
「不良少年に捨て犬を押しつけたら無事更正して立派な警官に、みたいな話ですよね」
なんて例えだ、とは思うが、当たらずとも遠からずといったところか。
「神様相手だとちょっと迂遠で気が長すぎる気がしますけど」

秘中の秘を打ち明けたというのに、驚きが少ないな。
「もしやとは思うが、これにも気付いていたのか？」
猫箱発言を思い返すに、十分あり得る。
「そういう事も可能かなーって考えてた事があるので、なんとなくピンと来ちゃいました」
最初に思いついたのはこういう奴に違いない。可愛い顔してなんて悪辣な。
当初黒男が聞かされたときには人を人とも思わぬ思考に呆れ果て、絶対に関わりたくないと思ったものだが。
そんな彼がこうして片棒をかついでしまった。大の虫を救うためには小の虫を犠牲にする事を厭わない。そういう斗流の業が染みついてしまったのか。
「千年以上も続けていれば、それなりに効果が出てきているかもしれませんね」
彼女たちを心から気の毒に思い気に掛けた先人達が、自らの魂を贄として捧げてきた。その歴史は無駄ではなかったと思いたい。
事実、古文書に記されている古代の雪娘は凶悪きわまりなく、人間への敵意にあふれていたという。それに比べれば今代の科戸嬢など実に可愛らしいものだ。
雪娘の精神状態が陸花媛本体を反映しているとすれば、十分に希望はあるのだろう。
「ああ。陸花媛の封印は人への害意が失われた時に解けるというが、その日が遠くない事を願うよ」
二度か、三度か、それとも十度か。転生が何度必要なのかまでは想像の及ぶところではないが。
黒男自身、その何度かには関わらざるを得ないのだろう。
「ふん。これではまるで生きエサの供給係だな。絶対に天国には行けんだろう」
と自嘲する。
「荒家三佐が鬼に堕ちたのも納得だ。さぞや恨まれてるだろうよ」
そこまで深い恨みと憎しみの感情が自分に向けられるなど、想像するだに気が重い。
「さあて、それはどうでしょうね」
志摩の口調は軽い。他人事だと思って。
「ただ疎まれ消えるだけだった芙柚ちゃんの生に最後に意味を与えて、未来永劫続くはずだった雪娘の受難を一代縮めたのは、黒男さんの決断なんですよ」
それに、と続ける。
「陸花媛は祟り神とはいえ神様の端くれといえる存在なのだから、丸くなって過去を悔いた彼女が神力でぱーっと歴史を改変。すべてを無かったことにしてくれて一件落着、って事もあるかもしれないでしょう？」
「どういう楽天的思考だ、そりゃ……」
まったく、お気楽なものだな。
「そういう可能性があるって思うだけでも、気持ちが軽くなりません？」
「まあ、少しぐらいはな」
そう答えると、志摩は満足げに緩く笑った。
癒し系といえば癒し系なのだろうか。こいつと会話していると、いちいち悩んでいるのが馬鹿馬鹿しくなってくる。
「そういう志摩はどうなんだ。少しぐらいは落ち込んだりはしないのか」

「そりゃあもう落ち込んでますよ。ご飯も喉を通らないぐらい」
主張する志摩の体型は相変わらず葦か藁っぽいが、血色はいい。
「……そうは見えないから尋ねているんだがな」
「私は芙柚ちゃんをお友達だと思ってましたよ。いなくなって嬉しいはずないじゃないですか」
確かに寮住まいの十家ゆかりの師弟の中でも、彼女を一番気に掛けていたのは志摩だった。馴れ馴れしく懐に踏み込んでいく志摩に対し、科戸嬢の方はありがた迷惑っぽい雰囲気ではあったが。
「でも素直に羨ましいとも思うわ。最後の瞬間、芙柚ちゃんはきっと幸せだったと思うから」
それはそうだ。そうでなくては困る。陸花媛の元へは三佐の魂とともに幸福を持って行ってもらわねば、無茶をやった意味が半減する。
「だが、死んで花実が咲くものじゃないからな」
「そう、まさにそれ！」
急激にテンションの高まった志摩は、ずいっと覆い被さるように身を乗り出してきた。
「近い、近い！」
「他人事とは思えないんです。タイムリミットがあるのは私も同じですから」
聞き捨てならない爆弾発言。
「はぁ？」
「実は人生のロスタイム謳歌中なんですけど、芙柚ちゃんと違って現世で幸せになれる余地ぐらいはあるんです。安心しました？」
「した。したから少し離れろ。暑苦しい」
実のところ全然してはいない。この展開はジェットコースターすぎる。とりあえずは情報を整理する時間が必要だ。
まずは襲撃者から十分距離をとり、改めて尋ねる。
「で、タイムリミットが何だって？　ちゃんと一から話してみろ」
「私、本当なら三年前に死んじゃってます。そこをゴネて十年延長してもらったんですけど、その代わりいくつかやることが出来ちゃいまして」
「何だそれは……」
黒男は頭痛に襲われる。
そういえば、ちょうどその頃だったはずだ。
流感をこじらせて生死の境をさまよった少女が、奇跡的な回復の後に突如として天才的な呪術の才能を発揮しだしたのも。彼女本来の黒い髪が藁束のような薄い色に変わってしまったのも。
何より、志摩は隠し事は多いが決して嘘はつかない。それを黒男は良く知っている。
ならば信じる他ないのだろうが。
「一体どこの堕神と契約したんだ、おまえは」
人間に害を及ぼす属性を備えてはいてもあくまでも神としての格をもった祟り神に対し、最低限のプライドも持たず妖怪との境界線を漂うような神々の存在もまた知られている。彼らは神性としての力こそ備えていても、多生の奇跡を起こし人間に恩を売りつけては利用するような真似をしばしばしでかすという点で、狐狸の経立の類と大差ない存在だ。正体の分からぬ祠に無闇と参拝するのが危険とされているのは、こうした連中との縁を繋いでしまう可能性があるためだ。
迂闊すぎる。少しぐらいは怪しもうと思わなかったのだろうかと苦言を呈したくなる。

だが、生きるか死ぬかの瀬戸際の中学生に他の選択肢があったとも思えないか。
「残念ながら、そのへんは禁則事項というやつです」
堕神の件ははっきり否定して欲しかったが、志摩には申し訳なさそうにそう言われてしまった。
彼らにとって口止めは常道だ。怪しい。
「本当は二十歳まで待とうと思っていたんですけど。でも芙柚ちゃん達を見ていたら、七年じゃ大して余裕があるわけじゃなさそうでしょう？」
黒男の心配を裏腹に自分の寿命について語る志摩の台詞は、やっぱり他人事のように聞こえる。
「幸い明後日は私の誕生日だったりするので、黒男さんからプレゼントなんか戴けたりすると嬉しかったりするんですけど」
この脳天気な娘の言動は、そんな運命を背負っているとはまるで感じさせない。
とはいえ、黒男とてあと百年保たないのは分かっているわけだから、そこらへんは割り切りなのかもしれないが。
「ですから、よろしければ睡蓮ちゃんのお父さんになってもらえませんか？」
「はぁ？」
また話が飛んだ。
先ほどからの話題と全然繋がらない。
「誰だそのスイレンってのは」
科戸嬢の死期を早めた罪滅ぼしとして、誰かの後見になれとでもいうのだろうか？
黒男の記憶にある限りでは、斗流の庇護下にある少年少女は珠附紫城学園寮に集められている。蛍荘の住人にそんな名前の人物はいなかったはずだ。
「睡蓮ちゃんは私の娘ですけど？」
この瞬間の衝撃をどう言い表せばよいのか。黒男の語彙には適切な言葉がない。
「おまっ、子持ちっ!?」
混乱する自分を感じ、樒の頭としての思考が感情にブレーキを掛ける。
予想外の状況に放り込まれたときには、感情を排して論理的に考えてみる事だ。
志摩は確か今年で十八だ。これまで中高と蛍荘での共同生活だったのだから、この菜箸体型の腹が大きくなっていればすぐに分かったはず。
冗談に違いない。
非難の意をこめてぎろりと睨み付けてやると、案の定。
志摩は頬を掻き、目を泳がせながら言う
「まあ、まだ生まれてないどころか、仕込んでもいませんけど」
「仕込むとか言うな……それなのに名前まで決まってるのか？察するに女の子っぽいが、どうして性別までわかるんだ？」
本来引っかかるべきはそこではない気もするが。
果たして。多分に心外さを滲ませた表情で、鋭く切り返される。
「察しが悪いフリをして、姑息にこの場を乗り切ろうとかしてませんか？」
簡単にごまかせる相手ではなかったようだ。
しかし、性別や名前うんぬんを無視すれば、彼女の言わんとすることはただ一つであり。

黒男の感情も理性も、ここはあくまで抵抗を試みるべきだと主張している。
「……子供を産む約束がある、なんて話じゃないだろうな？」
半ばは時間稼ぎの、やぶれかぶれの一言であったが、偶然にもそれが正鵠を射ていた。
「さっすが黒男さん」
小さく口笛なんぞ吹かれてしまった。
いつも通りお気楽な調子の志摩を前にして、自分の表情がみるみるこわばっていくのが感じられた。こいつはかなり洒落にならない。
身体を保たぬ不完全な鬼や堕神が物理的な身体を得る一つの手段として、魂を宿す前の人の子に憑くという方法が知られている。
通常は妊婦の魂自体が一個の結界として適した魂のみを呼びこむため、彼らが憑けるのは妊婦自身も既に堕鬼化している場合に限られる。
ただし、妊婦自身が胎児を召喚に用いる意思を持っていた場合はその限りではない。
それは失われたはずの禁呪の一つだが、種々の喪失呪を復活させてきた志摩になら行使できてもおかしくはないだろう。
「志摩、一体何を喚ぶつもりだ。そのスイレンってのはどういう鬼だ？」
黒男の有する鬼の知識にはそのような名はない。おそらくは何かの別名であろうが、いずれにせよろくなモノではないだろう。
「はあ、誤解してますね」
肩をすくめて首を振り、ため息。大袈裟なジェスチャーで呆れられてしまった。
「喚ぶってところまでは合ってますけど、睡蓮ちゃんはそういう有害な生き物じゃありませんから」
「手持ちの情報が不十分な状況で、真意を明かさない相手の発言が簡単に信用できるか」
あまりにも無警戒に過ぎる。本当に堕神や鬼神に誑かされていたらどうするつもりなのか。
最悪、陸花媛も問題にしないような怪物さえ呼び込みかねないような危険な術式は、矢車家とともに綺麗サッパリ失われてしまった方が良かったのだ。
志摩が本気で言っているのならば、樒の頭としては粛正対象と認定せねばならなくなる。
「仕方ない。他でもない黒男さんですから、特別に少しだけ話しちゃいましょうか」
「そりゃまたいい加減な禁則事項だな」
陸花媛件のように、流布されている情報と真実が解離している場合もある。
どう説得したものか、と考えていたところに、きつい一発。
「睡蓮ちゃんは、玲韻（れいん）ちゃんの御同類ですよ」
黒男は比喩でなく頭を抱える事になった。
その名を聞くだけで、ボリューム感のある波打つ黒髪と、鎖と錠前だらけのゴスロリ服が目に浮かぶ。
四三玲韻。当年とって七歳。四三本家のお嬢様にして、第一位新川家に連なるさおり嬢とならぶ斗流きっての問題児。
あれは鬼使いでも鬼憑きでもなく、魂自体に固有の特殊能力を備えた生き物だ。そういう意味では力の質としてはむしろ科戸嬢に近いが……

借り物の力に苛まれ続けて命を縮めた彼女と決定的に違うのは、玲韻はただひたすらに周囲に破壊を振りまくだけで本人に何のダメージもないという点だ。

歩く火炎放射器。ナチュラルボーン放火魔。

志摩謹製の封印錠前を四つも身につけさせて暴発だけは阻止しているものの、その気になれば岩でも金属でも灰も残さず蒸発させ尽くしてしまえるような、末恐ろしいお子様。

扱い方を間違えれば十分以上に有害な部類に属するだろう。

「あんなのを二人に増やす気か……」

「全部で八人になります♪」

愛想のいいコンビニ店員のようなテンションで絶望的な発言。

「国が滅びるぞ」

全員揃えば亡国戦隊結成ってとこだな。

黒男の皮肉に、首を横に振る志摩。

「むしろ逆。この国にとって必要な子達だって分かっちゃったのです。だから使命を果たすことにしました」

「！」

この発言で、黒男は唐突に悟りに至った。

志摩は時折予言じみた事を言う。斗流の過去の出来事を見てきたように語る事もある。

荒家三佐の暴走を言い当てたのも。いや、そもそも追撃に同行してきたのも、それが必要だと知っていたからに違いない。

要するに、志摩の本来の才能は、真実を知る千里眼ではないのか。あるいは、神託を受ける巫女の能力と言い換えても良いかもしれない。

となれば、失われた呪術の知識の入手元も推して知るべし。

熱病で九死に一生を得た時に才能が開花し、ついでにいろいろとロクでもないことを予知してしまったと。

それで辻褄があう。

まったく、いい加減な仕事をした能力鑑定士に小一時間も苦言を呈してやりたいところだ。

「ああ。分かった。だいたい分かった」

救いの御子の受胎予告とでもいったところか。

直感と大差ない根拠しかない事は予想できる。他人が納得いくよう説明できるものではないのだろう。

「本当に大丈夫なんだろうな」

それでも念を押したくなる気持ちも分かっていただきたい。

「お前まで粛正する羽目になるのは御免だぞ」

「そこらへんは私めの直感を信じていただくとして」

またもずいっと顔を寄せてきた。

「ともかく時間が決定的に不足しているので、恋愛とか告白とかデートとか悠長なことをやっている余裕がないんです。ていうか精子下さい」

「それとこれとは話は別だ。あと少しは歯に衣着せろ」

うら若い婦女子の発言とは思えない。親が聞いたら泣くぞ。

「婉曲に言っても逃げられちゃうと学習しましたから」

「あんまりストレートすぎても正直居たたまれなくなる」

黒男なりに精一杯の苦言を呈したつもりだったが、

「いえね、別に誰のでも結果は同じなんですけど。できれば黒男さんがいいなと思ったりもするわけなんですよ」

アプローチ方法を変更されてしまった。

こういうのは殺し文句というのだろうか。

「それに、こういう場合には前もって合意は得ておいた方がベターですよね？」
さしずめこちらは脅し文句だろう。
この魔女っ娘に強硬手段に出られた場合、体格差など屁の突っ張りにもならない事は明白だ。
民主主義に則って精一杯譲歩してますと言い張る、どこぞの覇権主義国家みたいな言いぐさだ。
「合意無しなら完全に犯罪だ」
精一杯虚勢を張り続ける。こういう場合、圧力を感じている様子を悟られては負け。
「実はですね……九條の丈吉さんにはずっとお返事を待ってもらってますし、六道の御当主は住むところまでお世話してくださるそうで、どうしようか決めかねてるんですよね」
今度は搦め手からの攻撃。
恐ろしいことに、挙がった名前はどちらも黒男よりずっと年上の人物だったりする。六道の当主など既婚どころか、還暦過ぎで孫までいる爺さんだ。
おじさんにばっかりモテる超年上キラー、と解釈するのは早計に過ぎるだろう。
むしろ逆。容姿にも才能にも恵まれた志摩は、同年代の男達にとっては一目も二目も置くべき相手だろう。釣り合いがとれるとはとても思えず、畏れ多くて恋愛の対象とは感じられないのに違いない。
こいつを前にして萎縮しないですむのは、既に盤石の地位を築き上げ、揺るぎない自信を持っている男だけだ。
かくいう黒男自身、現状に身震いせざるを得ない。どうして自分程度の男がこんなのに迫られねばならないのか。
「ああ、陸奥の十吾くんとの婚約話なんてのももちあがってたんですよ。あの時はさすがにお父さんがカンカンで……ふふふ」
ここまで来ると呆れるしかないが、斗流の旧家に常識を求めてはならない。
小学生の少年を許婚にしようなどという無茶も、陸奥家や七瀬家あたりが言い出したのなら本気だろう。矢車の再来と言われる志摩を招いて、斗流内での発言力を向上させたいという意向が見え見えだ。
「なんてこった……」
こう考えてしまっては志摩の思うつぼのような気がするが、今なら確かに言えることがある。
話を聞かされて腹を立てている自分がいる。
自分なら釣り合うと自惚れるつもりは毛頭無いが、後藤志摩の価値を真に正しく評価している男は自分だけだと信じられる。
この奇跡のような生物を、まるで価値の分からない連中にくれてやるのは勿体ないと思う。
ならばいっそ、と考えてしまうわけで。
「いかん……」
このままでは、ほだされる。
「まずい……」
「そろそろ限界かしらー？」
にやにや笑いを貼り付けた志摩に頬をつつかれる。
「あなたはもう陥落寸前でーす。無駄な抵抗はやめておとなしく投降しなさーい」
心中はバレバレの様子。確かにこれ以上は無駄な抵抗だろう。

それでも。それだからこそ、譲れない一線がある。
「なあ志摩よ」
「はい黒男さん」
「お前に選んでもらえたのは光栄だし、たぶん、嬉しいんだろう。お前と一緒ならきっと楽しくやっていけると思う」
「ふむふむ」
「だから、受け入れるわけにはいかない」
「なるほどなるほど」
二度頷かれた。
自分でも不親切だと思う説明に、どうしてここであっさり納得されるのか。
「幸せになるのが怖いとか、分かりやすすぎですね」
ばっさり一刀両断され、一気に自己嫌悪に陥るった。
無駄に察しの良すぎるこの娘には、話術とか駆け引きは通用しない。ただ自らの無様をさらすだけだった。
黒男は確かに幸福を恐れている。
単純な罪悪感からだけではない。樒の頭という精神的に過酷な仕事は、守りに入ってしまっては続けられるものではないからだ。
いざという時に大切な者を思い出してしまっては、昨日のような非情な真似はとてもできないだろう。
精神的な弱さの自覚があるからこそ、世俗的な幸せを頑なに回避せざるを得ない。
「情けないが、そのへんが俺の限界だ。見限ってくれてかまわんよ」
「黒男さんが意外と情けないのはとっくに知ってますし、今さらそんな事ぐらいで幻滅したりはしませんけど」
甘かったか。
「そもそも黒男さんは認識が甘すぎます。睡蓮ちゃんのお父さんになったところで、黒男さんが幸せになれるわけじゃありません」
「……実際、なりかけているから困っているんだがね」
そんなことを自信満々に言われても。現状で最大の心配事は、顔がにやけてしまってはいないかに尽きるのだが。
「そこのところはご心配には及びません。黒男さんには確実に不幸になっていただきますから」
自信満々の衝撃的発言に、さっきから自分たちが何の会話をしているのか一瞬見失ってしまう。
「待て待て。確か俺は求婚されてたような気がするんだが」
どうしても確認しておきたいという衝動に駆られてそう口にすると、
「結婚していただきたいなんて、そんな畏れ多いことは一言も言ってませんよ。だって黒男さんは玲韻ちゃんのためのパートナーなんですから」
またも衝撃発言。
確かに懐かれてはいるが、自動放火幼女と将来を約束した覚えなど毛頭ない。
「俺はお前と一緒になる話をしてたんだぞ」
志摩は目を閉じ、そっと首を横に振る。
「私は睡蓮ちゃんだけで十分幸せ。それ以上は誕生日プレゼントにしては度が過ぎます」
つくづく人間の言葉が通じない生き物だな、この魔女っ娘は。
散々遠回りしてようやく結論に向かいつつあった筈の話が、一転しておかしな方向へと暴走しつつある。

「いや、子供を産ませて籍も入れないというわけにはいかんだろう」
と一応正論を述べてはみたものの、
「故人曰く、結婚は人生の墓場とか」
「それをここで言うか？」
「しかも私はもう穴に片足を突っ込んでるんですから。あまり深入りしたら、必要以上に不幸になること請け合いですよ」
志摩の意志は頑なで、使命さえ果たせれば黒男とはそれ以上関わりたくないと言わんばかり。
「っがっ……」
すぐにでも不幸のどん底に到達できそうな気分になってきた黒男であったが、
それでも。
ここで引き下がるわけにはいかない。
強引にその気にさせておいてなお、人生を預けようとはしない。黒男を遺伝子ドナーとしてしか見ていないような態度の真意は奈辺にあるのか。
彼の知っている志摩は隠し事はしても嘘はつかないはずだ。そのつもりで向き合ってみれば、何か見えてくるものもあるかもしれない。
目の前にいる娘を改めて観察してみる。
背丈ばっかり高くてやせっぽち。正座して背筋を伸ばした彼女と、胡座をかいた黒男の視線がほぼ同じ高さになる。
美人の範疇に入るそれなりに整った顔立ちにも関わらず、化粧気のかけらもなく野暮ったい黒縁眼鏡を着用。
和風の顔立ちにはそぐわぬ稲藁を思わせる黄色い髪は、ざっくりと三つ編みにまとめられている。
服装は雪山でも空調の効いた隠し倉庫でも大差なく、やはりパーカーにジーンズ。ただし今日はスニーカーではなくビーチサンダルをつっかけている。
アクセサリの類は一切無し。
正直言って色気には乏しい。
「あのー、何かリアクションとかないんですか？」
この反応は予想外だった。
いやに察しのいい志摩のことだ。これまでのパターンからは、「今大変失礼なことを考えてませんでしたか？」、とか返されるに違いないと思っていたのだが。
違和感の原因を探るべく、さらに詳細に観察する。
「……なんですか、その司法解剖前の外観検査みたいな冷静な視線は。致命的にムードが不足してますよ」
先ほどからムードがない発言を連発していた人間の台詞とは思えない。
抗議を無視し、容赦なく全身の走査（スキャン）を継続。
レンズの奥から投げかけられる視線は小刻みに揺れており、肉付きの乏しい肩は微かに震えている。
指先は三つ編みの先をぐりぐりと捏ね回している。これまた普段の彼女のイメージにはない行動だ。
もしや、動揺しているのか？
「ははぁ」
だいたい理解した。
このお気楽娘も緊張することがあるのか。と少し可笑しくなる。
「なに笑ってるんですか？」

ほんの僅かであれ、志摩が怒りの感情を見せたのは初めてではなかろうか。余裕を失っている証左だ。
必要にして十分だと思っていても、それ以上を、ハッピーエンドを期待していないわけではないのだ。
彼女の発言は嘘ではなかったが、無意識も含めた思いの全てを反映してはいなかったといったところだろう。
馬鹿馬鹿しい。別に悩むようなことではなかった。
彼女の同級生達を笑えない。黒男もまた、最初から志摩に呑まれていたのだ。
こんなふうに相手に遠慮するなど、明らかに自分のやり方ではないのだから。
ならば。
こちらから手を差し伸べ、志摩の手首をつかんだ。
念には念を入れて、ついでに眼鏡も奪っておく。
「ふえっ？」
「確保完了だ。誰がなんと言おうが、志摩を妻にする事に決定した。反論は認めん」
十分な理論武装。そして一時的に優位になった勢いまで借りないと自分の感情に従うことも出来ないとは。つくづく男とは弱いイキモノだ。
「どうせなら二人で不幸になるぞ。いや、娘を入れたら三人か」
「もう……無茶苦茶言ってるってわかってます？」
抗議の口調にもかかわらず、目が笑っている志摩を目の当たりにして、選択の正解を確信した。
「無茶で結構。さあ、お父上に宣戦布告に行くぞ」
後半は半ば以上に本気だ。互いに退かねば命の危険もある。
「はぁ。仕方ありませんね。でもあくまでも一時的に黒男さんを借りるだけですから、そこだけはお忘れなく」
志摩の素の視線が、黒男を見据えた。
「私が死んだら、きっと玲韻ちゃんと結婚してあげてください」
そこだけは譲れないのか。
「大丈夫。あの子、凄い美人になるわ」
その点については、とうに確信してる。
「了解した。あいつにそのつもりがなければその限りではないが」
無理強い出来るものじゃないからな。
「それを聞いて安心しました。では、その時まで私は黒男さんと一緒にいようと思います。不幸なときも、もっと不幸なときも」
「さらに不幸なときも、とんでもない不幸なときもな」
そう。
「「死が二人を分かつまで」」

# 氷の姫君

春屋アロヅ

ざく、ざくと爪先が雪を踏みしめる音すらも、ごうごうという風の音に邪魔されて耳に届かない。前を歩く相棒と自分を繋いでいるワイヤーは、白い風の向こうに消えている。きっと大声で呼んでも聞こえないだろうし、例えあいつが振り返ったところで、きっと見えやしない。カイナは冷たい空気にしびれるように痛む顔をしかめて、ワイヤーとその先の地面らしきものを見つめ、歩いた。

ワイヤーは風に揺れて暴れているが、鉄線と銀糸をより合わせ両端の宝玉で強化したそれは、ちぎれることも凍りつくこともなく二人を繋いでいる。山越えの経験がなく、地図も頭に入っていないカイナにとっては文字どおりの命綱だ。そのワイヤーがまっすぐになるように歩を進める。方向を間違えればワイヤーがピンと張り、相棒と違う向きに歩いているとわかる。歩くのが遅れれば、ワイヤーに引かれて速度を上げるように促される。

今のところ、ワイヤーは風になぶられるままに暴れているから、向きも速度も相棒と同じなのだろう。もうどれくらい歩いているかわからない。最初は辺りを見渡したり、前方や足元を注視しようと頑張ったが、じきにあきらめた。見えないのだ。虎人族のカイナは筋力こそ人間である相棒よりも強いが、視力はほとんど変わらない。きっと相棒も似たような状況のはず、と思って、ふとその想像に恐怖した。相棒はめくらめっぽう歩いているのではないだろうか。

その想像は、今までほとんど機械的に足を動かしていたカイナの体に心を取り戻させた。思わず前を見る。ばたばたと動き続けるワイヤーの向こう、集中してじっと睨むと、うっすらと影が見える。強風に耐えているためかいつもより小さいその背中は、しかしふらつく様子もなく、辺りを見回しているようにも見えない。

大丈夫、と自分に言い聞かせた。何も考えていない言動はいつものことだが、自分たちの安全に関してはいつもちゃんと考えている。カイナの腰に回したワイヤーも、カイナの首にかかっている防寒の宝玉も、買った時はまた無駄遣いして、と小言を言った。しかし、それがなければそもそもこの山に入ることすらかなわなかっただろう。今も何らかの方法で、自分の進むべき方向を確認して、それに向かっているに違いない。

それが通じたのか、視界が少しずつ晴れてきた。吹雪が弱まっているのではない。相変わらずごうごうと風の音が耳をふさいでいる。視界の奥に暗い影が見えてきたのだ。それが岩壁であり、相棒はその岩壁に空いた洞窟に向かっているのだとわかったのは、さらにしばらく歩いてからのことだった。

カイナは白湯を入れたカップを差し出されるや、かぶっていたフードをはねのけてそれに飛びついた。ほう、ほう、と喉から息をしていると、湯気が口元から鼻に当たって、凍りついた肌がじわじわと溶けていく感じがする。

「慌てて飲むなよ。熱いからな」

「わかってるよ」

そう言ったのはカイナの相棒、レンジだ。自分のカップにも雪を詰めて、下から火で炙っている。火種がなくても小さい炎を出

すことができるのはレンジの魔術だ。他にも水をちょろちょろ出したりそよ風を吹かせたり地面に少しずつ穴を掘ったり、操れる術の幅は多岐にわたる。が、何をさせても規模が小さいのだ。炎は人の顔ほどにもできないし、鉄砲水を起こしたり人を吹き飛ばせるような風を起こすことはできない。ちょっとした雨を防ぐことはできても、この吹雪を防ぐことはできない。

「うー、生き返るなこりゃ」

そのレンジはカイナと同じように、湯気を顔に当てて幸せそうな顔をしている。こういう表情はひどく子供っぽく見える。

少し冷めた白湯を喉に流し込んでほうっと白い息を吐いた。それでようやく人心地がついたカイナは、相棒に尋ねた。

「あとどれくらいで着くの？」

レンジはすぐに答えずに、白湯をごくりと飲んでから、腰の物入れに入っている地図を取り出した。カイナがのぞきこむと、レンジは「今いるのがここだ」と指さした。

地図にはカイナたちが辿るべきルートが描かれ、その周囲の崖や岩壁、洞窟や目印になるものが書き込まれている。レンジが指さしたのはその中の一つ。ゴールからまだしばらく離れたところにある洞窟だった。

「ここがラストの休憩ポイントだな。後は神姫像まで一直線だ」

「……これ、あとどれくらい……？」

「そうだな、このペースだと二時間くらいじゃないか？」

遠いとも近いとも言える答えに、カイナはとりあえずカップの白湯を飲んだ。

「これさ、ゴールも洞窟なんだよね」

「らしいな。ちょっとしたダンジョンになってるらしい」

「何かいたらなんとかするけど、トラップはよろしくね」

「ああ。ガーディアンは任せる」

「おーけー」

着いてからの話ならカイナの答えも軽くなる。ダンジョンに潜って何かを探すというのはいつもの仕事だ。もちろん油断はできないが、前も見えないほどの吹雪の中を延々歩かせられるのに比べたら、なんてことはない。

「でも神姫像なんてなんでこんなトコに置いたんだろ。こんなトコじゃ誰も見らんないのに」

「さーな。昔の人の考えることなんて俺にはわからん」

レンジはカイナの疑問を一蹴した。

「昔の人ねー。昔はここもこういう吹雪とかなかったのかな」

「どうだかな。こんな高さの山がある日突然できるわけじゃねーからな。雪がなかったってことはあり得ん」

「じゃあ吹雪だろうが関係なく歩けたとか」

「の、方があり得るな。それか、天気の予測精度が高くていつ雪が降っていつ晴れるかが完璧にわかったとか」

「あ、それいーなー。いつ雨が降ってくるとか晴れるとかわかるの」

自分の疑問をあさっての方向に落ち着けたところで、二人は腰を上げた。外の吹雪は弱まる気配がない。

再び雪の中をざくざくと歩く。まるで何かの修行みたいだ、と思った。視覚と聴覚を吹雪で塞がれ、触覚も寒さに奪われて、一定のペースで決まったルートを進むことを強いられる。カイナ自身は「修行」と呼べるような訓練をしたことはないが、レンジの昔の話でこういうものもあったような覚えがある。聞いた時には

自分には絶対できないと思ったが、仕事ならなんとかなってしまうものだ。

依頼主である貴族の若旦那にはとても耐えられそうにないな、と考えたら、二人を大きな屋敷に招待してまで神姫像の絵姿を所望した華奢な青年の姿が浮かんだ。貴族であればレイピアくらい修めているものと思っていたが、あの細い剣すら五分と持っていられないように見えた。レンジも細身だが、代理人という仕事に見合うくらいの筋肉はあるし、強そうではなくても儚げなイメージとはほど遠い。

依頼内容も学者肌の彼らしいものだった。取ってくればいいんですね、と気楽に言ったレンジに首を横に振って、絵を描いてくれればいい、像は動かさないでくれ、と言ったのだ。有名なアナトリアの女神像は本来の場所を動かされたがために、人の耳目に触れるようにはなったが本来の意味が失われてしまった。写生を頼みたいトラキアの神姫像はほとんど知る人もいない聖遺物なのだから、そのまま人知れず本来あるべき場所にあるのがよい、ということらしい。

正直なところ、カイナには彼が何を思っているのかよくわからない。見たいけど見に行けない、なら取ってくればいいじゃないか、というのがカイナの考え方だ。人のものならいざ知らず、誰も存在すら知らないのだから。

レンジもよくわからないらしいが熱心に頷いて見せて、その場で話をまとめ、ついでに少し高めの料金を通してしまった。

ざく、ざく、と雪を踏みしめる音が、冷え切った足を通じて聞こえてくる。

カイナは聖遺物、と呼ばれるものを見たことがない。アナトリアの女神像も有名と言われているが、レンジと代理人を始めてから聞いたくらいだ。生まれた村には木彫りの神様の像があったし、町の教会には神や救世主の石像が置いてあって、それは何度も見た。最初に話を聞いた時には似たようなものだろうと思っていたが、まったく違うものらしい。

「アナトリアには四年くらい前に仕事で行ったんだ。そん時に女神像も見たんだけど、ありゃ確かに聖遺物と呼ぶにふさわしい代物だったな」

とは、出発前にレンジが言ったことだ。その時のスケッチはもう残っていないらしいが、最初は生きた女が眠っているようにしか見えなかったらしい。半ばまでしかない腕の切断面から垂れ下がった無数の糸と管、無残にえぐり取られた脇腹からのぞく板や半透明の袋が、それが人間ではあり得ないことを示していた、と。

「そのぶっ壊れ具合も含めてすげーきれいだった。あれがなんなのかはわかんないけどな」

「ひょっとして、また見たいから受けたの？」

「それがなくても受けたけどな。あれとは別物だし、神姫なんて言われてっけど、どんなもんなのかはわかんないしな」

そう言って画材を片付け始めたレンジは、言葉とは裏腹に目を輝かせていた。

ぼんやりと考え事をしながら、規則的に歩を進める。洞窟を出る前にあと二時間ほどだ、と言ってはいたが、今までにどれだけの時間が経ったのか、とうにわからなくなっている。とっくに二時間を過ぎている気もするし、まだ三十分くらいしか経っていないと言われればそうかもしれないと思う。目を凝らすことはあきらめて、レンジの腰から伸びているワイヤーを見ながら歩いてい

た。
だから、再び視界がはっきりし始め、目の前に黒い洞窟が口を開けていることに、しばらく気付かなかった。
洞窟に入って、外の光が届くギリギリのところでフードを跳ね上げると、ワイヤーを外して思い切り伸びをした。
「うっくぅー……！　あー、着いたー」
思わず漏れた声は、洞窟内にいんいんと響いた。
レンジも首をぐりぐりと回して体をほぐすと、かばんからカンテラを出した。かばんを背負い直してから、手早く火を点けた。
レンジが先に立って歩き始め、カイナはすぐ後に続いた。カンテラで壁面や天井を照らしながらゆっくりと歩いていく。カンテラを持ち上げるたびに二人の影が揺れる。
足元でかたん、と音がした。カイナは思わず足をどけて身構えた。レンジも足を止める。辺りはしんと静まり返り、カンテラの油が燃えるかすかな音が二人の耳に届くばかりだ。
「何踏んだ？」
「……あ、これかな。板切れが落ちてる」
カイナは足元の板を拾い上げた。いつからそこにあるのかがわからない、朽ちた木の板だ。
「こんなとこに床板があるんだ、ここが当たりってことだな」
レンジはそう言って、再び歩き出す。カイナも板を壁に立てかけて、その後に続いた。
洞窟は思いのほか深かった。緩やかな下り坂になっていて、ほとんどまっすぐな道がない。心配していたトラップはないようで、レンジはあちこち目を配ってはいるが、足を止めたのはカイナが板を踏んだ一度きりだ。
「アラームがあるだけなのかな」
「可能性はあるな。だとすると、ゴール付近に何かいるんじゃねーか？」
ひそひそと言葉を交わす。大事な神姫像を収めたダンジョンにトラップがないはずがない。それがないとなれば、トラップがなくても像を持ち去ったり壊そうとしたりする輩を排除することができる何かがあるのだろう。
途中で一度休憩を取ったが、座っていると、地面に触れた尻や背中から冷気が伝わってくる。外の吹雪と違って顔がひりつくような感覚はないが、宝玉がなければ芯まで冷えて動けなくなっていたかもしれない。早々に腰を上げて、奥へ、奥へ。やがて、レンジが再び足を止めた。カンテラをその場に置いて、腰のナイフを確かめた。カイナはその奥をじっと見る。カンテラの灯りが届くわずか奥は行き止まりになっていて、横穴が一つ、ぼんやりと黒く見える。
レンジはカンテラのシェードを三つ下ろし、自分たちの方にだけ灯りが漏れるようにして、再び手に持った。カイナはレンジの横に並び、背負っていた棍を手にした。
じりじりと坂を下り、横穴のすぐ手前まで来ると、カイナが棍をガツンと目の前の壁に突き立てた。穴の中に何かが動いた気配はない。続いてレンジがカンテラを突き出す。レンジの位置からは見えていないはずだが、カイナにはほとんど何もない空間が広がっているのが見えた。動くものの気配は目にも耳にも感じられない。
カイナはレンジの手からカンテラを取って、部屋の中に入った。灯りが漏れている方向を部屋の奥に向けて、思わず構えた。

「レンジ！」
鋭い声に、レンジはすぐに入ってきた。カイナが提げたカンテラのシェードを手早く上げてから受け取った。カイナがすぐに構えるのと、レンジが高く掲げたカンテラの灯りが洞窟内の小部屋を照らし出すのとはほぼ同時だった。
視界がきらきらと輝く。壁の下半分を氷が覆っていた。その氷に飲み込まれるように、磔にされているように、跪いて天を仰いだままの人影。そしてそのそばに、刃の部分が妙に長い槍を片手に握って片膝をついた別の人影。露出した胸の膨らみや腕の線から、どちらも髪の長い女性のようだった。目を閉じたまま、呼吸をしている気配すらない。
しばらく無言のまま対峙していたが、微塵も動かない二人の人影に、カイナは焦れた。
「おい、そこの女。あたしたちは神姫像を探しに来たんだ。知らないか？」
構えは解かないまま、なるべく抑えた声で尋ねる。答えはない。
「カイナ、とりあえず大丈夫だ。たぶん、どっちも神姫像だ」
「……は？」
思わず視線を外して、間抜けな声を上げてしまった。レンジはわずかにためらって、カンテラを掲げたまま二人に歩み寄っていく。
「お、おい！」
カイナも慌ててその横に並ぶ。氷漬けになっている方はおそらく死んでいるだろう。だが傍らで槍らしいものを持っている方は、単に気配を消しているだけで、不用意に近づいたら突然襲ってきそうにも思える。
レンジが近づくにつれて、二人の様子がはっきりとわかる。カンテラのオレンジ色の灯りでは肌の色はわかりづらいが、どちらも同じような色に見える。同じ色の灯りを受けているレンジと比べると白い。レンジは仕事の割に色白な方だから、雪のように白いか、むしろ血の気が無くて真っ青なのだろう。
「レンジ、あたしが調べるからそんなに近づくな」
「ああ、わかった」
レンジは素直に足を止めた。カイナはいつ動いても対応できるよう、右手の棍を握り直して、一飛びに距離を詰めた。槍の絵を思い切り蹴飛ばして、武器を手放させようとしたのだ。が、ガンとしっかり当たったのに、槍は微動だにしない。彼女の握力が尋常ではないのだ。
しかし、気付かないはずがない衝撃にも彼女は目を開ける様子もなければ、槍を握り直す動きもない。本当に彫像であるかのように。
カイナは彼女と同じように片膝をついて、わずかにうつむいたその顔をのぞき込んだ。女のカイナが思わず息を飲むくらい整った面立ちだった。細く調えられた眉にも長いまつげにも白い霜がびっしりとついているが、通った鼻筋、そっと閉じられた薄い唇、そのどれもがカイナと同じくらいの年頃の美女だった。
破れているように見えた服は完全に凍結して、おそらくちょっとした振動や自重で割れてしまったのだろう。元は襟のついた白いシャツに黒いズボンという出で立ちだったのが、袖と腰回り、足首に残っているだけで、ほとんど裸と言ってもいいくらいだ。その肌には、アナトリアの女神像にあったという無残な傷痕は一つも見当たらない。

カイナは彼女の頬に触れた。氷のように冷たい頬はしかし、わずかに押すと表面の氷がぴしぴしと砕け、人のそれと同じ柔らかさでくにっと凹んだ。何故か背筋がぞっと冷たくなった。
「……レンジ、変だこいつ。こんなんなったら普通死んでるはずなのに、死んでない」
「生きてるのか？」
「いや、たぶん生きてるってわけじゃないけど……」
「じゃあ神姫像だろう。アナトリアの女神像も触った感じ生きた人間と変わらなかったらしい。ただ普通の人間より重くて体温は全然ないって」
レンジはそう言って、もう一人の方に近づいた。
「まさか二人組だったとはなー」
氷の壁にもたれかかったまま、その壁に半ば飲み込まれたような格好の彼女も、見えている限り傷があるようには見えない。眠るように目を閉じたその顔立ちは、やはり絶世の美女だ。だが、槍を持った方よりも年上のように見える。わずかな幼さの残る槍持ちの女と違って、成熟した女の美しさがあった。
氷漬けになっているから、ということも手伝ってか、レンジは足元と天井を手早く確認したくらいで、彼女にひょいと顔を近づけた。そのまま横から氷に埋まっている部分を見て、試してみたくなったのか、そっとその髪に手を触れた。
「ちょっ、折れちゃわないか？」
「そんなに力一杯触ってねーよ。んでもまあ、これは確かにちょっと力入れたら折れるな」
そう言ってすぐに手を離し、今度は氷の奥に伸びている腕が見えないかと目を凝らし始めた。
「……つか、これが神姫像で正解ならさっさと絵描いて帰ろうよ――」
呆れ声で言った言葉が終わるや否や、カイナは何かの気配を感じてとっさに身を固くした。直後、腹に猛烈な一撃を食らって、堪えきれずに仰向けに倒れた。
「がっ……!?」
鳩尾を強打されて、呼吸もままならない。痛みに涙目になりながら横に転がって、どうにか立ち上がった。棍を杖代わりにして体を支え、深呼吸して顔を上げる。
「うわっ……とぉ！」
レンジはカイナがやられている間に気付いて神姫像から離れていたのだろう。「彼女」の攻撃をギリギリ避けて、こちらも距離を取った。ナイフに手をかけながら、ゆっくりカイナの方に近づいてくる。カイナも呼吸を整えながら、レンジに近寄っていった。その間も視線は「彼女」から外すことができなかった。槍を持っていたはずの「彼女」は、武器を置いたままレンジに飛びかかったらしい。わずかに残っていた服や靴もはがれ落ち、全裸のままでこちらに視線を向けてくる。
「動くのかよ……神姫像ってのは」
「あれがガ……ゲホゴホゲホッ！」
「しゃべんな。そうかもな。聖遺物の中にもお姫様と護衛がいたってことか」
「あなた方はどなたですか」
聞き覚えのない少女の声は「彼女」のものだろう。見た目よりもかわいらしい声で丁寧に、しかし冷たく誰何する。
「俺たちは代理人だよ。俺はレンジ。こっちはカイナ」

「代理人、どなたの代理人でしょう」
「依頼人の名前は他人に言わないルールなんだよ」
レンジはいつもの軽い口調で答えた。「彼女」は咎めることなく続けた。
「ではご用向きは？　ここには我々二人がいるのみで、他には何もない、ただの洞穴です」
「あんた方二人に用があってきたんだ。美しいお嬢さん」
「我々に何のご用があると？」
「俺はこれでも絵心があってね。あんた方の絵を描かせてもらえないかね？」
わずかに沈黙があった。レンジの言葉が信用できないのか、自分たちの肖像を描かれることを嫌がっているのか。
「それだけですか」
「俺たちが受けた依頼はそれだけだ。お二人さんの絵を描くこと。できれば正面と横顔と二枚ずつ描かせてもらえるとありがたい」
「では、何故彼女に触れようとしたのですか？　私が起動したということは、彼女に触れたはずです」
「気に障ったのなら失礼。謝るよ。ただの彫像だと思ってね。素材がわかんなくて髪に触っただけだよ。もちろん、凍ってるのはわかってたから折らないように注意した」
レンジの言葉に「彼女」はすいとこちらに背を向けると、氷漬けの女性の髪をじっと見た。傷がついていないかどうか確かめているのだろう。じきにこちらを振り返った。
「わかりました。絵を描くだけであればご自由に。ただし、そちらの女性。武器を収めていただけますか？」
初めて「彼女」がカイナと目を合わせた。カイナはわずかにためらったが、棍を背中に背負い直した。
「これでいいか？」
「結構です。では、どうぞ」
「彼女」は先ほど座っていた位置に戻りかける。それをレンジが制した。
「あ、ユキホちゃんもセッカさんの隣にいてくれる？　立ってても座っててもいいから」
「かしこまりました」
レンジの注文に素直に従って、セッカのすぐそばに戻ると、むき出しの両膝をついて行儀よく座った。カイナは思わず、
「冷たくないの？」
と訊いてしまった。「彼女」はカイナを不思議そうに見た。
「冷たいとは感じますが、それを苦しいとは感じません」
「……？」
「俺たちと違って、冷たいものに触り続けても平気なんだろ」
「そうです」
かばんから紙と鉛筆を出しながらレンジが口を挟む。それに「彼女」は頷いた。が、カイナはまだなんとなく納得がいかない。
「なんで？」
「我々の表皮は人間の皮膚とは異なり、低温に耐性があります。この岩盤の温度でしたら長時間触れ続けていても劣化しません」
何やら妙に小難しい言い方をする。
「これくらいの冷たいものならずっと触ってても痛くもかゆくもないんだとさ」
レンジの通訳でようやく理解した。レンジは画材箱を立ててそれに腰を下ろし、画板に紙を置きながら尋ねた。

「ところでお嬢さん、よかったら名前を聞かせてもらえるかな？」
「私はＶＹ１－Ｓ５５９、個体名『ユキホ』。そちらはＶＹ１－Ｓ５４２、個体名『セッカ』です」
「オーケイ、ユキホちゃん。じゃあ先にセッカさんから描いちゃおうかな」
　レンジの口調がどんどん軽薄になっていく。だが鉛筆片手にモデルを見る目は真剣だ。カイナはレンジの斜め後ろに立って、レンジの手元とユキホとを両方視界に入れた。
　しばらく、カンテラの油の音とレンジの滑らせる鉛筆の音だけが部屋の中に響いた。カイナはレンジの邪魔をするまいと口を閉じているし、ユキホも何も言わずにレンジを見ている。やがて、輪郭を描き終えたレンジが口を開いた。
「そいやーユキホちゃん。お二人さんはなんでこんなところに？」
「我々はトラキア山の警備兵です。キリキアとの国境線の警備と遭難者の救助などを主業務にしております」
「いや、この洞窟の中にってこと」
「失礼いたしました。この洞窟に入ったのは雪崩が発生したためです。セッカが雪崩に巻き込まれたのを救助し、偶然ここに辿り着いたのですが、天候の回復後も地理情報が確認できず救難信号への応答もなくなったため、やむなくここに留まっておりました」
　カイナは聞いていてクラクラしてきた。偶然ここに、まではともかく、その後は意味がよくわからない。だが、レンジはそれをわかっているのかいないのか、平然と話を進めた。
「じゃあセッカさんがこんなんなっちゃったのは？」
「雪崩の衝撃で処理系に故障が発生したことと、表皮の一部が破損してしまい、体内に結露と凍結が発生したのです。表皮は応急処置を施したのですが間に合わず、せめて温度、湿度が一定の空間に安置しました。私も修復の機会があればその際に問題なく起動、報告ができるようにと休眠状態に入ったのですが、前回起動した時には既にこの状態になっておりました」
「前回っていつ頃？」
「私のクロックが正確であれば、ですが、四十六年と十五日前です」
「四十六年⁉」
　カイナは思わず叫んでしまった。カイナの父親が生まれるよりも前に目覚めたのが「前回」だというのだ。
「ってことは、それからまた四十六年寝てて、さっき起きたってこと？」
「はい」
「え、待って。あんた何歳なの？」
「人間で……生物で言う年齢とは異なりますが、製造後五百十三年二ヶ月八日が経過しています」
「ごひゃ……」
　カイナは絶句した。目の前の、どう見ても五歳と離れていない少女が、実は魔女並みに長生きだというのだ。
「よっし、描けた。次、次……」
　レンジは椅子代わりの箱ごと立ち上がると、二人のすぐ横に腰を下ろした。またしばらく無言で鉛筆を動かし、途中からユキホに話しかけつつ仕上げていく。やはりユキホの話すことは半分以上よくわからず、レンジもわかっているように答えて会話を続けているが、ちゃんとわかっているのかどうかは疑わしい。
　四枚目の絵ができたところで、レンジは立ち上がって思い切り

伸びをした。満足いくまで描けたのだろう。
「じゃーユキホちゃん。俺らはこれで帰るわ。モデルありがとね」
「いえ。ところで、差し支えなければ教えていただきたいのですが、トラキア本国は現在どのような状況でしょうか」
「というと？」
「我々は登録警備兵です。長期にわたって活動が不明な場合、別の警備兵が捜索に当たる規則になっていますが、五百年近くも経過しているにもかかわらずこの位置が見つけられないというのは異常です。本国が何らかの理由で警備兵の捜索に人員を割けないような事態になっているのであれば、私はセッカをこの場に置いて帰還せねばなりません」
「んー……何と言ったらいいか……」
　レンジが言いよどむと、ユキホは初めて表情らしい表情を見せた。
「何があったのですか」
「たぶんなんだけどさ。俺らはトラキア王国から来たんだけど、ユキホちゃんのいた頃のトラキア王国は一回滅びてるんだよね」
「な……」
　ユキホは絶句した。カイナも、レンジの言葉に眉をひそめた。レンジは続ける。
「ユキホちゃんが雪崩にあってこの洞窟に入ったのってさ、十歳前後の時じゃない？」
「製造後十二年三ヶ月目です。それに何の関係が――」
「俺らの定説じゃあね。今から五百年くらい前に世界の国はほとんど全部滅びてるのよ。理由はよくわかってない。たぶん昔はわかってたんだろうけど、五百年の間にわかんなくなっちゃったんだろうね。今じゃ「終末の日」なんつー陳腐な呼ばれ方をしてるけど。たぶんユキホちゃんはその終末の日にちょうどこの洞窟の中に入って、それで生き延びたんじゃないかな」
　ユキホは呆然とレンジを見つめていた。
「それでは、セッカの修復や私の燃料の供給は……」
「んー、ユキホちゃんの燃料がなんなのか知らないからそっちはなんとかなるかもしれないけど、セッカちゃんは無理だろうね。俺、昔セッカちゃんと同じように壊れちゃった子見たことあるけど、誰も正体がわかんなくて女神像ってことにしちゃってたくらいだし」
「では、私はこれからどうすれば……」
　ユキホの表情は、先ほどまでの無表情が嘘のように、不安と混乱に満ちていた。カイナにも、その状況は理解できた。
「じゃあさ、ユキホはあたしたちと一緒に来ればいいんじゃない？」
「え？」
「んー、それもありかもな。少なくともユキホちゃんは助かるかもしんないし」
「燃料って、要は食べ物があればいいわけでしょ？　それだったらネノスさんちに行けばいいじゃん。神姫像動かすなって言ってたけど、本人が来ちゃった分には断らないんじゃない？」
　カイナにはそれが最善策に思える。ネノス家は裕福な家だから、一人ぐらい食客がいても困ることはないはずだ。ユキホは少し迷っていたようだったが、頷いた。
「わかりました。あなた方に委ねます」
「よし、じゃあ帰るか」

「その前に。ユキホ、何か着るものない？　今はいいけど、っつかレンジの前で素っ裸ってのもどうかと思うけど、街中裸で歩くわけにいかないじゃん」
　ユキホは眉をひそめた。
「それが、休眠中に凍結してしまったようです。替えの衣類は持参していませんでした」
「お前の貸せばいいじゃん。たぶん入るだろ」
「んー……まあいいけど。じゃあたしの服貸すからそれに着替えて。あとレンジは出てって！」
「はい、はい」
　絵まで描いといて今更なぁ、というレンジの尻を蹴飛ばして、ユキホに服を渡した。
「お借りいたします」
　丁寧に受け取って着替えたユキホは、同じ服を着ている自分とは比べものにならない美少女だ。
「あ、靴！」
「身体的には問題ありません。先ほども申し上げましたが、私の表皮は低温に耐えられるように作られておりますので。道義的にも、衣類ほど大きな問題にはならないかと」
「そっか。悪いけど我慢してね。じゃ行こうか」
　すぐ外で待っていたレンジと合流して、洞窟をゆるゆると上る。
「しっかし、本物が来ちゃったらネノスさん超びっくりするよね」
「そりゃそうだ。でもま、大歓迎はされるだろうな」
「間違いないよね。奥さんいないみたいだし」
「んー、というより世界の秘密を握っちゃったってことだからな。あの人歴史の勉強してるみたいだし、理解したら狂喜乱舞するだろうな」
「……なんか怖いそれ」
　本当に狂喜乱舞する様子を思い浮かべてしまった。軽くげんなりする。が、洞窟の入り口に着いて、それは吹き飛んだ。
「晴れてる！　よかったぁー」
「おー、きれーに晴れたな」
　洞窟から外に出ると、さっきまでの吹雪が嘘のような青空が広がっていた。上機嫌で振り返ると、ユキホは複雑そうな顔で辺りを見渡していた。
「ユキホ。落ち込むな、っつっても難しいだろうけどさ。これから新しい人生が始まるんだ。ちょうどいい青空じゃん」
「そうそ。あたしたちみたいに気楽に生きてたら、きっといいことといっぱいあるって」
「……はい。ありがとうございます」
　ユキホは律儀に頭を下げた。

# 私たち、恋愛復旧担当デス

Fukapon

「あーあー、これで四人目かぁ」
「クリスマス前だってのに、振られる話ばっかってどーなのよ？」
昼下がりの教室は今日も今日とて喧噪に包まれている。
「まいったねー、先週は皐、その前は弥生と私こと可愛い如月ちゃん。ここまで生き残ってきた涼も、ゴールを目の間にして――」
「べ、別にクリスマス目当てで付き合ってたんじゃ……」
「そりゃそうだけどさ、やっぱり少しは意識するよね。街があのざまじゃあねぇ」
小高い山の上にある学校の、三階の教室から外に目を向ける。
街のメインストリートは赤と緑の飾り付けで染まっていた。夕方になればイルミネーションも灯るのだろう。
絵に描いたようなクリスマスシーズンに、少女たちは溜息を深めた。
「ま、振られちゃったぁものはぁ仕方ない。今年もみんなでパーッとやりますか」
「だねー」
「……反省会になりそうだけど」
「いやいやいや、悪いのは男であって私たちじゃ――」
「はいはーい、授業始めますよー」
女三人寄れば姦しい。
言葉の通りの教室を制したのは、午後一コマ目の担当教員。チャイムから少々遅れて教室の扉を開け現れた。
ショートカットの髪にパンツスーツ、キリリと実用的な格好のはずが、彼女が着るとどことなく親しみやすく見えてしまう。尤も、どんな格好でも生徒の反応は変わらなかったろう。
「千鶴ちゃん遅刻だよー」
教え子に下の名前で呼ばれてしまうあたり、クラス担任でもある彼女、雨宮千鶴の立ち位置が窺える。
「こら、『雨宮先生』でしょ？」
もはや何を言っても無駄であろうが、千鶴は今日もまた同じように言い返している。この辺が友達扱いを受けてしまう所以であると、彼女自身は気付いていないようであるのがまた彼女らしい。
「学校の中では先生と生徒です、ちゃんとけじめをつけましょうね」
教壇に上がりアイコンタクトをバッチリ決めて注意すると、おもむろに出席簿を開き出した。
千鶴は今日も、いつも通りに進行中。
――状況は常に変わります。魔法による事故を起こさないよう、臨機応変な対応を忘れないでください。
それは千鶴の口癖だったが、今の彼女はどうであろう。
高校生ともなれば、生徒も子供ではない。建前の何たるかを知っている。変わる状況を捉えぬ彼女が、公私の区別をつけるなどできようか。
生徒たちは目敏く見つけ、ケロリと言い放つ。
「雨宮先生は真っ昼間っから何をなさっていたんですか？　長ぁい髪の毛が肩についてますよー」
にやりと音が聞こえそうなほどの悪い笑みが教室を支配する。
教壇の少女は、変化した状況に囚われた。

「ふぇっ、嘘っ？　直してきたのにっ」
左肩をパタパタ、右肩をパタパタと慌てる彼女に機を見るなど、さすがは臨機応変を教えられた子たちだ。
「直される前は何をなさってたんですか？　ここ、学校ですよね？」
「ななんあ、な何もやっていません、いませんから！」
頬を真っ赤に染める彼女に、とどめを刺したのは天性の才能だった。
「千鶴ちゃんはいいなぁ。私は昨日振られたのに……」
すっかり茹で上がった面を教卓に向けると、もう、いつも通りに授業などできない。
「いやいや涼、そこは許してやろうよ。年功序列って奴でさ」
「ついに今年、三十路突入だもんね。千鶴ちゃんだって必死なんだよ」
「うあ、ひどっ。思っててもそれは言っちゃダメだって」
彼女が入ってくる前より騒がしくなる教室に、千鶴は半泣きで立ち尽くすほかない。
それでも彼女は、先生だった。発せられた一言を聞き逃さない。
「やっぱり魔法がうまいと、恋人も捕まえておけるのかなぁ？」
天賦の才、または天然と呼ばれる能力を持ってして、涼の言葉は扉を開けた。
高天女子魔法学校には今年もまた、特別授業の季節がやってきたのだ。
「あ、あの！　みんな聞いてくださいっ！」
くっと視線を上げた先生の呼びかけに、生徒は綺麗に反応する。
「はーい、言い訳聞きたいでーす」
さしもの千鶴も
「言い訳は、しません。確かにその、ご想像の通り、と言うか……」
なんて言おうものなら、教室は――
特に変わらず。静観維持。
「え？　ええっと、どどうしたんですか？」
想定外の出来事に千鶴は慌てたが、生徒たちの反応は平静だった。
「先生は私たちに騒いで欲しいんですか？　静かにして欲しいんですか？」
「も、もちろん、静かにして欲しいのですが……」
「ならいいじゃないですか、ねぇ？」
生徒一人の科白に教室の大半が頷くと、再び教室は静まった。
「そうなんですけど……。ととにかく、みなさんに大切なお話をします」
千鶴はキリッと先生の表情に戻り、池に石を投げ込んだ。
「そろそろクリスマスも近いですし、その、恋人と別れたとか、あると思うのですが……」
穏やかに広がった波紋は、生徒たちの表情を疑問の色で染めていった。
程度の差こそあれ、魔法を操る少女たちが集まっている。勘はいいのだ。
どこからともなく声が通った。
「あの、どうして『別れたとか』なんですか？」
生徒一同、同意の沈黙をもって待つ中、千鶴はテンポよく答える。

「本校の子たちはだいたいこの時期、別れるのが恒例なんです」
「え……？」
「普通、カップルが増える時期ですよね？」
「学校単位で、そうなんですか？」
答えに対する反応は、千鶴の予期した通りであった。高天の教員生活七年のキャリアは伊達ではない。
「ええ。原因は定かではありません。その昔は『生徒の恋愛なんて』と気にも留めませんでしたが、あまりに現象が顕著で、一時は調査をした先生もいらっしゃったそうです」
水を打ったように、教室中が千鶴の言葉に耳を向けた。
「魔法使い。その存在は十分に認知されていますが、数は少数で、能力はまだまだ未知のものです」
あるものは真っ直ぐ前を見つめ、あるものは頷いている。
「よって仮説でしかありませんが『魔法が恋愛のような心の働きに対し、何らかの影響を与えるのかも知れない』とその先生は考えました。今から十五年前のことだそうです」
「結局、どうだったんですか？」
丁寧な説明に痺れを切らした生徒の問いに、千鶴は今年も明かす。
「魔法の影響はないと、結論づけました。理由は簡単で、調べうる世界中の魔法学校のうち、この傾向が見られるのは日本の一部だけだったからです」
明快な回答に対して、スッと腕が上がり、質問が返される。さながら平常授業だ。
「この時期、つまりクリスマスってことですけど。国内と海外とでは文化が違うため、比べることに意味がないのでは？」
「そうですね。時期としてはクリスマスから年始にかけて、まさにお国柄が出ます。では国内でどうかと見ると、全てで十二ある魔法学校のうち、現象が認められたのは三校」
「ああ、女子魔法学校の数ですね」
「当たり。調査した先生は在籍する高天を改めて見て、こう結論づけた。総じて、我が道を行く子が多いから」
一区切りした千鶴に頷くものもあれば、解せぬと首を傾げるものもある。
解せぬの代表はもちろん、振られたばかりの涼。
「具体的に、何が別れる要因なの？」
あなた自身が悪いと言われている現況に納得いくはずもない。
気持ちが映し出された瞳に、千鶴は問うて返した。
「みんなは高天の制服、どう思いますか？」
意外な問いに虚を突かれながらも、おのおのが自らの制服を見直す。
そんな姿を笑顔で見守る千鶴には、今年も同じ答えが返された。
「んー、ちょっと黒過ぎるけど、可愛いと思いますよ」
「あったかいしねー」
「制服にラップキュロットやタートルネックは珍しいけど、私も好きかな」
概ね好意的な反応。
彼女がこの話をするようになって早何年か、不評が返ってきたことがないのが、校風を伺わせよう。
「長めの丈のボレロにタートルネック、下はラップキュロットにタイツ、ショートブーツの黒ずくめ。肌色なし。肌色なし。大切なことだからもう一度言いますね、肌色なし」

千鶴は答えを三度も繰り返すと、「わかりましたか？」と言わんばかりに小首を傾げた。

生徒の方もここまで言われると察するのが常で、苦笑いを浮かべるものが半数以上だ。女子校でありそんな高天なので、反応も露骨なのである。

「脱がせにくい、セックスしにくいってことですか」

「ご明察。洋服の問題ではなく、みんなの意識が、ですけどね」

「身持ちが堅いつもりもないけど、焦る理由もないから……」

「みんながみんな、こんなだもん。安売りしてまでってのはないよね」

「安いものが求められるこのご時世、お高いものは売れないと」

厳しい冗談に千鶴さえも苦笑を浮かべながら、パンパンと手を打った。

「大切なのはここから。私たちは魔法が使える、だから困ったときに魔法に頼りたくなるのだけど――」

「魔法は万能ではありません。魔法以外の選択肢の方がたくさんあります」

先生の言葉を引き取るかのように、生徒たちは斉唱した。

千鶴はこんなところが受けないんだろうなぁと思いながらも、明るい笑顔で締め括る。

「よくできました。でも、本当に気を付けてください。失敗して覚えるんだと言う人もいますが、失敗なんてしない方がいいんですから」

彼女は言い切ると、手元の教科書を開く。

生徒たちも同時に教科書を開く中、涼がポンと、また言い放った。

「先生も、失敗したの？　相手が女の人なら、失敗しないの？」

千鶴は目を見開き、カッと頬を紅潮させた。

落ち着きを取り戻したのは、次のチャイムが鳴ったあとだった。

職員室の自席で突っ伏していた千鶴の頭上から、凛とした声が振ってきた。

「お疲れさま」

「音陽先輩ぃ、今日は疲れましたぁ」

彼女が甘ったるい声とともに上体を起こすと、お気に入りのマグカップに入れられたコーヒーが差し出される。

「彼女たちから聞いたわ。この時期の高天には必要なことよ、ちょうどよかったじゃない」

「そうですけどぉ。すぅーっごく恥ずかしかったんですよ？」

ぷくーっと頬を膨らませカップを受け取る千鶴。

湯川音陽はスルッと長い髪を滑らせながら屈んで、可愛い膨れっ面を覗き込む。さらには彼女の頭をポンポンと叩いて微笑んだ。

「髪の毛一本見逃してくれないとはねぇ。キスマークでも付けていった日にはどうなるのかしら」

「うー、冗談じゃ済みませんよぉ」

「でも、たまには気兼ねせずにやってみたいかも」

「……それは、ちょっといいかも」

彼女はすっくと立ち上がり、再び俯きがちの千鶴を視界の端に寄せ、歩み出す。

「あ、今日は先に帰ってて。私、仕事あるから」

「えっ？　あの、お夕飯は……？」

「食べてくからいらなーい」

バイバイと右手を小さく振りながら、音陽は職員室をあとにした。
「今日は一人、か……。つまんないなぁ」
千鶴は閉じられた扉をぼーっと見ながら、手の中のコーヒーを燻らせた。

§

帰り道、千鶴は久しぶりの感覚に落ち着かず、天を仰ぐ。綺麗な星空が見える。
「た、たまには、ね、一人もいいかもだよね」
独り言の先では息が白く変わる。
「音陽先輩はお仕事なの！　仕方ないの！　よーし、一人だってちゃんと料理しちゃいますよーっ」
学校からの帰り道、家とスーパーマーケットでは半ば逆方向。
彼女は小さく拳を握ると、踵を返した。
「ふふーん、こんな寒い日にはシチューとかぴったりかなー？　じっくり煮込んで、明日は先輩と一緒に食べられますよねっ」
雑踏の中へと歩みを早めたのは寒さのためだけではなかろう。やはり音陽のための料理となった夕食の予定は、彼女の口元を緩めた。
彼女がそうであるように、今や帰宅ラッシュの真っ直中。これから夕食時。繁華街は大賑わいだ。昼間の教室から俯瞰したように、クリスマスの準備も万端。赤と緑の飾り付けにきらびやかなイルミネーションが、街の賑わいを盛り上げている。
「ちょっと買い過ぎちゃったかなぁ」
袋いっぱいの食材を引っ提げて、千鶴は家路につく。
職場から買い物に直行となったので、彼女の左肩には通勤用のトートバッグ、右手には買い物袋だ。小柄な彼女なので、傍目にも頼りなさげな足取りである。
（重たいよぉ。仕方ない、駅を抜けて近道しよ）
背に腹は買えられない。最近は避ける道を歩む。すると早速、避けている理由にぶつかってしまう。
「あ、千鶴ちゃん！」
そう、このルートは生徒たちとの遭遇率が高いのだ。
「こ、こんばんは。金沢さん、風間さん」
先生とてどこかには住んでいるわけで、それが学校の近くであることにおかしなことはない。先生と生徒が学校外で偶然会うのだって不思議なことではないだろう。
「こんばんわー。って、大荷物だねぇ？」
「えっと、まぁね、お夕飯でも作ろうかなぁって」
ただ、私生活を覗き見られるのが今はちょっと困ると言うか、恥ずかしいと言うか。
「二人分にしても、これは……」
「ううっ！」
何食わぬ顔で急所をついてくるのは、学校の外でも変わるはずがない。さすがは天然の子、風間涼。
隣の金沢如月も同様、相も変わらずいたずらっぽい笑みを絶やさない。
裏表がないことを素直と言うべきか。千鶴は困りながらも変に感心すると、少し、心に余裕ができた。
「はいはい、何人分でもいいでしょう？　あなたたち、帰宅部よ

ね？　ちょっと遅くありませんか？」
　先生っぽくすれば少し落ち着いて見えるよね。とは千鶴の考えなのだが、果たして本当にそう見えているかは「千鶴ちゃん」呼ばわりから推して知るべし。だいたい、不必要に大きな買い物袋を引っ提げてでは説得力がない。
　しかし、今回に限って言えば、話題を逸らすのに成功したようだ。
「んー、数学の補習だよぉ。まぁ、涼はまじめだから、自分から聞きに言ったんだけどさ」
「うん。千鶴ちゃんの旦那さんのところだよー」
「だ、だだだ、旦那さんだなんてっ。『湯川先生』でしょ！」
　残念ながら、逸らした先の話題はもっと悪かったが。
　千鶴の肌が白いせいなのか、赤くなると本当に目立つ。今もまた綺麗に染まっている顔を前に、如月も涼も愉快にじゃれ合っている。
「あー、何？　音陽先輩がネコかにゃ？」
「そうにゃの？　にゃんにゃん、おうちでは千鶴に優しくして欲しいにゃん？」
「ああの、ね、二人とも。そーゆーこと絶対、ぜーったい音陽先輩に言わないでくださいね？　いじめられちゃいます……うう……」
　千鶴はようやっと重たい荷物をその場に置くと、両手を合わせて、半泣きでお願いしている。
　対する二人組は、この辺にしておくかと名残惜しげな物言いで聞き入れた。
「仕方ないなぁ。千鶴ちゃんがタチ希望ってことは、旦那さんには秘密ね」
「秘密にしてあげますっ」
　三人寄れば姦しい女子高生の秘密がどの程度のものか言うまでもないが、今の千鶴が胸をなで下ろす程度の品質ではあったらしい。
　しかし安心するだけでは終わらなかった。
「けど……」
「け、けどって、なな何？」
　逆接で滑り出した涼の口は、恐ろしいことを宣った。
「私たちが言わなくても……、本人、そこにいるよ……？」
「ふぇええっ!?」
　涼はスッと、千鶴の背後を指さす。
　千鶴は悲鳴を上げながら振り返ると。
「なーんてね」
　涼の科白は冗談だと告げた。
　ところが。冗談のはずなのに、千鶴の視界には、冗談のはずなのに見えている。
「うううう嘘……」
「あらー、涼ってば目敏い子。黒髪の大和撫子がいらっしゃいますねぇ」
　その様相は如月にも見えており、千鶴の見間違いなどではない。
　その上、とんでもないおまけ付きだ。
「しかも可愛い男の子と。あちゃー、これちょっとヤバいんじゃない？」
　三人の視線の先は、如月の言う通り。
　見覚えのあるなんてものではない、毎日、今日も今さっきまで

目の前にいた音陽が立っている。これまた驚いたことに、見覚えのない男と一緒に。顔こそ見えず、長身の音陽に比べれば小さいが、服装やたたずまいは間違いなく男性だ。
千鶴は唖然と立ち尽くすほかない。
如月と涼はおふざけの延長なのか、千鶴を励まさんと思ったのか、遠くに見える二人に声をあてている。
『今日は楽しかったですっ！』
『ふふっ、私もよ。じゃあ、また明日ね？』
『は、はいっ。あの、その、お別れの……』
『もう、甘えんぼさんなんだから。チュッ♡　バイバイっ』
「ってホントにキスしなくていいんだけど……」
適当にあてていた科白がドンぴしゃで当たってしまい、如月の顔は笑みが消えたどころか、若干青ざめている。
一方、涼はこんなときでもおっとり微笑んでいた。
「あららぁ、仲良しさんっ」
千鶴は、声にも表情にも何を出すこともなく、ただ眼前の状況を見つめていた。

§

翌朝の二年一組、ホームルームの惨状は言わずもがな。
挨拶と出欠確認の後、申し送りすらなく千鶴は教室を出て行った。
「泣き通しかなぁ。目、真っ赤だったよ？」
「いやー、現場を見ちゃったあとはもう、放心状態だったからねぇ」
「うん。置き去りにされた鞄、私たちが持って追いかけたくらいだもん」
惨憺たる状況。
彼女の異変たるや、気付く気付かないのレベルではなかった。
「付き合って一、二ヶ月だよねぇ？　まさにバカップルだったのに意外だわぁ」
「ホントのところ、どうなんだろね？」
「湯川先生は公私キッチリ派だから、聞くに聞けないし」
噂話と言えば女の子の大好物。
休み時間になれば「音陽×千鶴に破局の危機!?」と盛り上がっていたが、最後の休み時間、五時限目の前は少々様子が違った。
「次、数学だよね……」
「どんな顔してくるのかなぁ。いわばここは、奥さんの本陣でしょ？」
もう一方の当事者、旦那さんこと音陽の授業が控えている。
目撃証言を踏まえれば、圧倒的に音陽が悪者だ。しかし教室の温度は上がりきらない。
「でもさ、湯川先生が浮気ってなくない？」
「そうなのよねぇ。千鶴ちゃんが酔っ払ってやっちゃってましたー、とかあると思うけど」
「優しい音陽お姉様だから男にゃ人気あるだろうけどさ、簡単に乗る感じじゃないもんね」
日頃の行いというのはいざというときに出るもので、音陽はまさに、それがポジティブに働く人物のようだ。
状況証拠と人格のギャップ。
その真相が明らかに――

と、緊張の走る教室で、ふんわり言ってのけるのはもちろん彼女だ。

「湯川先生、きっと、凄く困ってると思うの。だって先生は、千鶴ちゃんのこと大好きだもの」

涼の発言は、みなの確信でもあった。

信ずるところが声に出され空気が暖められたところに、音陽は現れる。果たして涼の予想通り、音陽の表情は雨模様。

「えっと、欠席者はいませんね。では教科書――」

それでも淡々と始めるあたりが彼女らしい。

しかし気もそぞろであることは明白だった。私語の山と化して、露骨に異常な教室の中で、ひたすらに授業を進めているのである。

もちろん生徒らの話題は、噂と憶測の答え合わせだ。

「涼の言った通りだね。反省するしない以前って感じ」

「ほっぺたのアレ、痣だよね……？　千鶴ちゃん、意外と武闘派？」

「殴られたってことは、千鶴ちゃんとこ行ったんだ。んー、常習犯なのか、理由があるのか……」

彼女たちはひそひそ声で話すことをすっかり忘れ、もう普通の話し声に近い。

生徒が騒いでいても、自分のことで騒がれていても、音陽はひたすらに授業を進めている。

「はい。ではここを、風間さん、解いてみてください」

（うあー、このタイミングで涼か！　涼を指名するか！）

音陽には何の意図もなかったろう。おそらく、目が合ったから程度の話だ。

しかし生徒一同、無言の期待が高まる。涼ならやってくれる、私たちの切り込み隊長、涼なら――

期待のヒロインはトコトコと歩み、教壇に上がる。

黒板にササッと解答を記した。ここまでは当然、いつも通り。

（さぁ、涼！）

みなが注目する中、彼女はついに、くるりと音陽に身体を向ける。教室の緊張感は急激に高まった。

（おおっ、やるか？　やるのか⁉）

気色ばむ涼に、音陽はいったい何事かとピクリと眉を動かす。

刹那、彼女が名刀を抜いた。

「千鶴ちゃんのことでお困りなのはわかりますが、これ、前回やったところですよ？」

「え、ええっ？　嘘、ごめんっ」

涼の言葉に音陽が大慌てで教科書をめくる。

その様に教室中、今日初めての笑顔で埋め尽くされた。

「うあっ、ホントだよ！」

「えー、しっかりしてよー。ってか教科書開いてなかったわ」

「さすが涼！　己の道に迷いなし。ちゃんと授業を聴いてたとは……」

「湯川先生も人の子なんですねー」

黄色い声が溢れる中、苦笑いとは言え、音陽も笑みをこぼさざるを得ない。

「済みません、私の個人的なことで……。次は気持ちを切り替えてきます。ごめんなさい。今日はここまでにさせてください」

チャイムが鳴るまであと十五分。異例の事情で授業を終えた教室は、緊張の鎖から解き放たれていた。

部活動へと向かうもの、家路につくもの。彼女たちの行動こそ

いつも通りであったが、話題はやはり、音陽と千鶴である。
三学年合わせてもたった六クラスと小規模であることに加え、女子校である。噂は一日と立たずに隅々まで行き届くのだ。
噂の根源たる涼と如月も、帰り支度をしながらしきりに話していた。
「湯川先生も相当弱ってたねぇ。んー、浮気するような人には見えないんだけどなぁ」
「うん。湯川先生はそんなことしないよ」
「と言っても……。千鶴ちゃんだって信じてたんだろうし、ショックだよねぇ」
「そ・こ・でっ！　すっかり消沈の千鶴ちゃんを元気づけようと思うの！」
涼はパタンと抱鞄を閉じると、二カッと笑って「千鶴ちゃんを元気にしよう大作戦」の説明を始める。
「私ね、魔法で人の心を変えられることもあると思うの――」
程なくして空が闇に包まれた頃、二人は教室を出た。
「じゃ、誘ってくるわ」
「うん、お願いね」
手を振りながら先行した如月は、ふと振り返って悪い笑みを浮かべている。
「しっかしねー、私も全然気付かなかったわ」
「んー、愛が足りない？」
「うあー、とんでもないことを言うねー」
彼女は改めて背を向けると、にやにやしたまま廊下を歩んだ。
「私は急いで帰らなくちゃ」
涼も足早に、昇降口へと向かった。

――喫茶リーフ
看板などなく、店名の書かれたプレートがドアノブに引っ提げてあるだけ。構えからして小さな喫茶店。
如月がドアを押し開け中に入ると、おなじみの声が返ってきた。
「いらっしゃいませ」
涼だ。
窓際テーブルの片付けを中断すると、二人のお客様に正対し、ゆっくりと頭を下げている。
「いらっしゃったー」
勝手知ったると言った雰囲気で挨拶する如月に対し、顔を上げた涼は小さく首を傾いだ。
「あれれ？　如月、顔色悪いよ？」
「外が寒過ぎて、ね……。早くも雪が降りそうよ……」
「予定通り、寒くなったね！」
「ま、まぁ、そうなんだけどね……」
苦笑しながら涼の挨拶に応答した後、如月は流れるように振り返り、改めて笑顔を作った。
「お帰りなさいませ、お嬢様」
「えっ？　ここってそういうお店、なんですか？」
「もちろん。ご覧ください、涼のあのメイド姿を――って、違うんだけどね。単に制服がエプロンドレスなだけです」
入り口をくぐった千鶴にさもありなんと挨拶をした如月は、質問に答えながら彼女を迎え入れている。
「そ、そうですよね、普通の店構えでしたし」
足を踏み入れた千鶴は、店内をきょろきょろ見回している。

待っていた涼は、思いの外暗い影が薄れた千鶴を見て首を傾げた。

今日の様子然り、千鶴は思っていることを隠せない。故に今は、多少なりとも回復したのだろう。しかし、たった数十分の帰り道で、回復材料はそう多くないはずだ。

如月が道中余程うまくやったのか、メイドに面食らったのか。はたまたそれ以外か。思案を巡らせていると、二人の間で如月が声を上げた。

「んもー、心配しないで入って入って。こちらのカウンターへどうぞー」

「あ、うん。ありがとう」

千鶴がスツールに腰掛けたのを見届けると、如月はカウンターの逆側へ。

「着替えてくるねー」

そして店の奥へと消えた。

如月に代わって、千鶴の応対は涼が引き継ぐ。と言っても、黙々と手を動かしているだけだ。

静かになった店内に、千鶴は少し落ち着かない様子で涼を眺めている。

涼は水を汲んだケトルをコンロにかけると、背面のキャビネットから紅茶の入った缶を取り出す。続いてお客様から見えるよう並べられた、いくつかのティーカップから一つを選んだ。

そして待つこと数分、沸いたお湯で茶器を温め、次いでポットに茶葉とお湯を入れる。

「慣れているんですね」

口をついて出た千鶴の言葉に、涼はタイマーをセットしながら答える。

「もっちろん。だって私、ここの副店長さんですよ？」

「えっ？」

「と言っても、店長はお兄ちゃん、あとはバイトの如月で、全従業員なんだけど」

「ああ、なるほど。それじゃあ昼間はお兄さんだけですか？」

「はい。ほとんどの時間、店内にはお兄ちゃんだけ」

「ご、ごめんなさい……」

「気にしない気にしなーい。そーゆーお店なんだもん。それに、寂れたお店が欲しいときだって、あるから」

千鶴は苦笑いしながら、脱ぎ損ねていたコートに手をかける。

「あーあ。どっちが先生かわかりませんね、これじゃ」

「案外、恋愛は私の方が先輩、かも？」

「それはさすがに……」

涼の言うことは尤もだった。今ここにいることがそもそも、彼女や如月に心配されてのことなのだから。

それでも、いくら何でも恋愛経験で涼に劣るものだろうか。

千鶴はよもやあるまいと思い直し、ふと止めていたコートを脱ぐ手の動作を再開させる。

涼はどう見ても恋愛慣れしているような女の子ではない。彼氏と別れたという話すら俄には信じがたいほどだ。如月を改める彼女は、失礼にも思っていること筒抜けの視線を突き刺している。

対する涼は、気付いてか気付かずか、顔色温かなまま。

「恋愛って、顔や、ましてや胸でするものじゃないと思う。垢抜けない顔だって、ぺったんこの胸だって、好きって気持ちが大切なの」

何に囚われることなく言い放つ涼は果たして本物か。あるいは恋に恋して現実が見えていないのか。
千鶴にも明らかにする術はなかったが、今の彼女の心に届くためには、どちらであっても構わなかったのだろう。
「そう、ですよね。私、情けないな……」
自嘲気味に呟くと、視線をテーブルに落とす。
ひょっこり再び現れた如月は、彼女とは対照的に晴れ晴れと会話に加わった。
「そうさねー。でもね、男はやっぱ顔で選ぶんだよねーこんちくしょー」
「私の好きな人は女ですけど」
引っ張られるように声を、顔を上げた千鶴の表情は、彼女が「リーフ」に入ってきたときを思い出させる。
（私も如月と話すとなんか、元気になれたなぁ）
くすぶっていた疑問が氷解した涼と。
私物のヘッドドレスを決める如月と。
カウンター越しに千鶴が見るのは、おそろいの制服姿。女子高生。
「私も二人ぐらい可愛かったら、よかったのかな」
「んー、私たちは確かに可愛いけど。今は衣装のおかげかなー」
「自分で可愛いとか言えちゃうのは、羨ましいです……」
「でしょ？　可愛いは若いうちってね」
「そんなことないよ。千鶴ちゃんは可愛いし、この制服だって似合うと思う」
「えー、さすがに三十路じゃ――」
「まだ二十九です！」
――ピピピピピピピピ……
涼がセットしていたタイマーが時を告げた。
あまりにもよいタイミングで。
「本当に二十九ですっ！」
「機械は正直だねー」
笑い声の満ちた小さな店内で、涼は淀みなく紅茶を注ぐ。
その様子に見入っていたのは、千鶴だけではない。
「あー、それ、アリヤのオータムナル！　私が今日、一番に飲むはずだったのにぃ」
「バレちゃった？　あ、缶を隠すの忘れてた」
「えー、隠すつもりだったの？」
如月は涼の手元から茶葉を保存する缶を取り上げる。
「私の可愛いアリヤちゃん、寝取られてしまうのね……」
よよよとわざとらしい悲しさを演出する如月は、ただひたすらに小さな缶を見つめている。
涼が二つ目のティーカップに注ぐのにも気付かず。
三つ目のティーカップに注ぐのにも気付かず。
「はぁ、ほら、見て」
仕方なく涼が声をかけると、彼女は大輪の笑顔を取り戻した。
「なんだー、私の分もあるのね。早く言ってよぅ」
「はいはい、如月はケーキ三人分取り分けて」
「おっけー」
手に持っていた缶をゆっくりキャビネットに戻す。
一連の会話、そして如月の所作。紅茶に詳しくない千鶴にも何となく察しがついたようだ。
「あの……、その紅茶って高級品？」

「もう、千鶴ちゃんってば。品のない聞き方だなぁ」
恐る恐る聞く様が、滑稽だったのだろう。如月はケーキを前にして、笑いを抑えるのに苦労していた。
涼も千鶴にお茶を出しながら、相好を崩している。
「うーん、高級と言えば高級かな。でも、如月が楽しみにしてたのは――」
「アリヤの新しいお茶だから！　これ、昨日入ってきたばっかなの」
トンとケーキケースを閉じると、質問に答えながら、三皿に六切れのケーキを乗せて給仕する。
「はーい、本日のケーキはモンブランとりんごタルトでございます」
「ありがとう、金沢さん。それで、アリヤってお茶の名前ですか？」
「茶園の名前です。紅茶は茶園によって味が変わるんだけど、私にはいまいち……」
「涼は愛が足りないね。大切な人の細やかな違いに気付いてこそ！」
「そりゃまあ、毎日ただでお茶を飲みまくるほどの想いはないもん」
「うー、それを言われると……。ま、いいや、冷める前にいただきまーす」
如月は首を竦めながら、千鶴の横に自身の紅茶とケーキを並べると、あっという間に着席。ティーカップに手をかけたときだった。
――チリンチリン
入り口のドアが開く音。
「いらっしゃいませ」
応じてカウンターの向こうから挨拶する涼と。
「いらっしゃいませー」
席を立ち、ワンテンポ遅れで挨拶する如月。
「こんにちは」
返ってきたのは、男性の声だった。

# ゆっくり行こう、いつまでも

## 川鵜鶏肋

タイトルは漢字では “樒の杜” あるいは “閾の守” となります。mCMX6 収録の拙作 “Must be Happy” の１７年ぐらい前のエピソードですね。いつかやりたかった、無愛想なおっさん＆小娘を書けて満足です。過去話は書きやすいなあ。

## 春屋アロヅ

世界の終わりのその向こう、お気楽二人組が雪山を行く。という感じでお届けいたします。指定キャラは……氷漬けの美女、ということでひとつ。

***http://third.system.cx/***

## Fukapon

当日仕上げのコピー本の乗りなんだから、未完だろうと何だろうと構わない。気軽に参加してよ。と言ってる私です。まさか自分でやってみせることになるとは思いませんでした。ごめんなさい。しかしまだ、来年の話はできないなぁ。これ終わったら、衣装製作始めよう。納期？ 短いのには慣れっこさ。でも、短すぎだよね。

***http://www.fukapon.com/***

## レイアウト

お空はまだ暗いのです。もうすぐ冬だから、うん、早いからじゃないんだ。
さて、印刷もしちゃいますかね。速いの入れたんだー。

***http://www.projectkaigo.org/***

mnfikmyhk
CREATURE MIXING 8
# 雪山にて

2011年11月20日　初 版 発 行

発行所　まにふいくみやはか
http://www.projectkaigo.org/

印刷／製本　project KAIGO

Copyright © 2011 川鵜鶏肋，春屋アロヅ，Fukapon，まにふいくみやはか
この本は Creative Commons「表示 2.1 日本」ライセンスに従い頒布されます。
詳細は http://creativecommons.org/licenses/by/2.1/jp/ をご覧ください。

http://www.projectkaigo.org/

**NEXT ISSUE** MAY 2012

**募集中** あなたの作品

**テーマ** 大好きな場所